



未来歪曲／衝動定義

媚びる女のようにしつこい赤。

頬紅というよりは口紅に近いその色は、私の手を真っ赤に染めていた。

指と指は脂をぶちまけたかのように、ぬるり、と滑り虹に光る。きつと脂肪が手に付着しているのだ。だからこうも——これは美しい。

だが、私の手を濡らす赤は咎の結晶。

罪人の血だ。

足元でまだ唸っている男を蹴り飛ばす。遠くへ飛ばすことは出来なかったが、代わりに男の腹から中身が飛び出た。瀕死の男にしては面白い演出に、少しか頬が上がる。

もしかしたら、と込上げたものを飲み込んで、私はこの惨劇場に背を向けた。

コイツではないし、コイツなのだ。

自分にあげた活力剤ことばで心を浸し、一步を踏み出そうとした瞬間、

「スマートに殺すのね」

心臓が撥ねた。

急いで振り返る。

月ノ下、血溜マリノ上、声ノ主ハ、私ニ微笑ンダ。

「誰！」

自分でも驚くほどにヒステリックな声が出た。それはしようがない。さっきまでこの女はこの場に居なかったのだから。

こんな森の中で、まるで散歩に行くかのような軽い存在。それこそ童謡にあるイヤリングを落とした少女のように。

長い黒絹の髪。手の平程しかない顔。雪の肌。恐ろしい程にカテゴリーから破綻した美の結

晶。むしろそんな女が、こんな人間の縮図せいしに立っている事こそが、現場を見られたことより

恐ろしく感じてしまう。

「貴女こそ誰？」

心が寒い。

芯から身震いを促す声で、彼女は問いかけてきた。

「教えられませんか」

教えられるわけない。それは自首したのと同義なのだから。

「でしようね」

自分より年上なのか下なのか分からない女は苦笑した。その仕草は人間らしいのに、酷く人間らしくない。

きつとそれは、

「だって、自分でも解らないんでしょ？」

女が、ちっとも人間らしくない、歪で、綺麗過ぎる、まるで宝石のような、翠の眼をして
いるからだろう。そもそも人間の眼ではないのだ。だからこうも心が寒い。例えるなら獣と
対面しているようなもの。美しさで威されて、心を覗かれているのだ。

「どういう意味——」

「解っている癖に」

女の断定に会話が止まる。柄を握る。しようがない。しようがない。

だって、ここで見逃すわけにはいかない！

「始めるの？」

見られている。まただ。また私を見透かす。

止める。見るな。その生きてない眼で私を見るな。見るなと言っているのに！ 何で言う
ことを聞かないのだ！ もうお前は、私に何をされても文句は言えないぞ！

森を駆ける。耳で風を聞く。

私と女の距離は約三メートル。知らずのうちに後退していたようだ。

だが、それを一気に零に。手にはしっかりと柄の感触。

時——可笑しい。

さつきから脂汗で警告していた脳が不審を告げる。

系——可笑しい。

だが目前。必殺の間合い。

列——可笑しい。

爪が食い込む位に柄を握り。

、——可笑しい。

鈍く光る刃を振り上げて。

開——可笑しい。

脳髓を飛び散らせようと。

通——だから可笑しいと言っているのに！

全力で包丁は虚空を切った。

決して、避けられたのではない。

ただ、女はこの場に居なかったのだ。

居なかったのだから、当るものも当たらないのは当然。

行き場を失った包丁は、モノを切る事も無く、白い。

——いや、それは本当に可笑しい。

ゆめまぼろし
今までが全て、私の見た幻覚だと言われても信じよう。そもそも出来すぎた女だったのだ。
夢幻の類ならば納得がいく。

しかし、私がある前にやった事に関してはこの結末は違う。

そうだ。私の手はあんなにも真っ赤だったのに。

そうだ。指なんか使えない位に脂肪に塗れていたのに。

そうだ。ここは血溜まりで。

そうだ！ 私はあの男を殺した筈なのに！

どうしてどこにも、その形跡が無い？

血が無い。死体が無い。女の形跡が無い。

深い森の中。生い茂る草木。あった筈のモノは無く、私の記憶だけが残っている。

まずは落ち着かないといけない。そうだ。焦って要らぬミスをするのが一番良くない。

私は一度、大きく深呼吸をして男が倒れていた筈の地面に触れる。森特有の湿り気を除けば、手が赤く濡れることも無い。血が地面に吸収されたというわけでは無いらしい。ありえないが仮に、あの女が何らかの理由で男を担いで逃げたとしても、血液だけは持ち運べないはずなのに。なのに、それが無い。

さて、どうしたものだろう。

死体、血液、女。

先ほどまであったものが、一瞬で全て無くなった。木の上でもない、地面でも無い。行動する音すら聞いていない。

そう、確かあの女は突如湧いて出た。

つまりは仕掛けがあるはずなのだ。一瞬で現れ、消えるトリックが。

だが、それが仮に在ったとしても、私に付着していた物まで無くすことなんて出来るのだろうか？

いや、そもそも。トリックがどうであれ、私がやっていたことを見た人間が要る。

つまり私は犯罪者になってしまうわけだ。それはいただけない。

私は何も悪くないのだ。悪いのはアイツ等の方だ。私から勝手に私を奪って置いて、それで安穩と生きている。犯罪者というのは本来アイツ等のようなモノを指す。

私には正当な復讐の権利がある。

そして、アイツ等は殺される理由が存在する。

人の日常を奪った奴等から、自分の日常を奪い返して何が悪い。

そう、これは復讐なのだ。殺されないといけない人種なのだ。だからこれ以上私のような悲劇を繰り返さない為にも。これは未来を救うための、いわば正当防衛のようなもの。そう、アイツ等は殺されないといけないのだ。犯罪者はあつち。私は被害者。それが前提。

でも、それが第三者のせいで逆転しようとしている。それだけは阻止しないとイケない。そうして。赤く濡れたかった私は、頬だけを濡らして、森を出た。

七月。

気持ちの悪いくらいに原色に近い青を頭上に、愛を歌う蟬に文句を吐きつつ、決して健康的ではない肌の色をした少女は溜め息を吐いた。

彼女は夏が嫌いなのだ。

暑い、蒸す、煩い。その彼女が嫌う要素の全て入っている夏が、少女は大嫌いだった。

しかし、もう少しでその要素から開放されるのだと思うと、いつも無愛想な少女も少しばかり嬉しそうになった。そこだけ見ると、実に歳相応の少女のように見える。

が。あえて一言おう。この少女は変だ。

まず外見的特長からして奇怪極まりない。

髪。染色などをせず真っ黒で、自分で適当な位置で欠みを入れる。最近こそ一定だが、一時期は髪の長さに酷くバラつきがあった。今は顎程の位置で切り揃えられている。

肌。時期に逆らい雪のよう。訂正。雪ではない。これは大理石の類だ。光を内から漏らすような淡い白。これだけは、誇るべき美しさの一つだが、本人はどうでも良いらしい。

体軀。瘦軀に尽きる。が、そう見えるだけ。きちんとした肉付きをしているのだが、そう思わせないのは、無駄な肉が無いせい。性能としては上々と言える体。

眼球。枯れた黒椿のような色。焦げた黒とでも言えば良いのか。ただ威圧的で、酷く魅力的な色をした黒。硝子が在る故に、まるで宝石のようだ。

包帯。いや、仕様としては眼帯と称するのが正しいのだろうが。この少女は年中、怪我病気等の理由ではなく、左目を包帯で覆っている。それが、酷く見るものを不安にさせる。

部分は美しい少女なのだが、全てが合わさると如何せん。主に包帯が少女の日常を連想させない要因の一つ。

つまりは、近づき難い雰囲気を持つ少女だった。

少女の名前を、如月^{きんづき}葉月^{はづき}という。

日計高校の二年。今日が終業式だった彼女は、学友と明日からの輝ける休日の日々を話すでもなく、まっすぐに“日比野探偵事務所”に向かって歩いている。探偵に用事があるわけではない。彼女はそこに住んでいるのだ。

数分後。葉月は目的の“日比野探偵事務所”にたどり着いた。一階部分は駐車場になっており、白い車が一台だけ止まっている。事務所のある二階へは駐車場のすぐ隣にある階段からしか入ることが出来ず、その通りに彼女は真っ直ぐに階段を登った。

薄暗い階段を登っていくと、左手に“日比野探偵事務所”という白い簡素なプレートが付いたベージュ色の鉄扉。非常口にありそうなその扉は人を歓迎しているようには思えず、そ

れに比例してか、この事務所への依頼は二ヶ月に指十本で足りてしまうのが現状だ。

(まあ、道楽の類だしな)

葉月は、ぼう、とプレートを見ながらそんなことを考えた。

彼女の思う通り、この事務所の主な収入源は、仕事の依頼などでは無い。この事務所の持ち主は探偵という職業以外からの収入で、この事務所を運営している。つまり探偵事務所というものは、その人物の趣味道楽のようなものなのだ。

汗が頬を伝うのを無視して、葉月はその重苦しいドアを引いた。瞬間、少女の体を涼やかな風が全身を撫せた。

冷房の効いたドアの向こうは真っ白な空間で、その部屋に存在するのは奥へと続くドア、硝子のテーブルを挟んで対面する黒皮のソファーだけ。硝子のテーブルの上には、ファミリアレストラン等で見かける設置型の白いブザー。つまり、これを押せば奥の部屋から探偵が出てくるということなのだろう。

それにしても、この事務所は徹底的に客をぞんざいに扱う作りになっている。それは逆に、客を減らすにはどうすれば良いのか、というものを実に心得た作りとも言える。

どちらにせよ、この事務所は本当に排他的な構造をしているのだ。

葉月はそのソファーに腰掛けるでもなく、ブザーを押すわけでもなく、そのまま奥に歩いていき木製の扉を引いた。

「おかえり、葉月」

ドアを開け切る前に男の声。特徴の無い、印象に残らない声。高いでも低いでもなく、男性の平均的な声の高さで言われたそれに葉月は、

「了、麦茶」

と答えた。素っ気無いにも程がある。そもそも会話が成立していない辺り、少女には端から聞く気がないのだということが窺える。

「一応僕の方が年上なだけだな」

そう言いながらも声は遠くなっていく。不満を漏らしながらも彼女の頼みを聞いたらしい。ドアを完全に開けると、先ほどの部屋より涼しい風が葉月を撫せた。

目の前には二つの灰色をしたデスク。その右奥には最初の二つを並べた程の木製の机がある。部屋の両脇は本棚で占拠されており、この部屋は酷く息苦しい。言うならば圧迫感を感じさせる部屋なのだ。大きな机とは反対方向。葉月の居るドアからは左方向には窓。日比野探偵事務所と書かれた板が張られている。その窓から四歩程奥に歩くと、了と呼ばれた男が冷蔵庫を開けていた。この部屋が、普段探偵が過ごしているオフィスである。

「了。京子は居ないのか？」

了から渡された麦茶の満たされたコップを手にして、葉月は何気なく問いかけた。彼女にしてみればどうでも良いことなのだろう。ちなみにその葉月が口にした名前こそ、この事務所所持ち主の名前である。

「いや。京子さんは三階じゃないかな」

「ふうん。寝てるのか？」

この事務所は四階建てだ。この部屋へと続く重苦しい扉の反対には、まだ階段は続いており、三階が寝室と四階が物置になっている。ちなみに四階は常に開いておらず、いつも鍵が掛かっているのが葉月はその部屋に入ったことが無い。まあ、入りたいと思ったことが無いというのが正しいのだが。

コップに注がれ麦色の液体を、葉月は一気に喉に流し込んだ。空調のおかげで大分体温も下がってはいいたが、内からも冷却を促すことでようやく、彼女は自身の嫌う暑さを感じなくなっていた。

喉を潤して落ち着いたのか、コップを了に返却する葉月。

「ただいま」

「はは。相変わらず遅いね、葉月は」

コップを受け取り、了と呼ばれた青年は笑った。

葉月は、この草野くさの了りょうという青年が苦手だ。

というのも、確固たる自分というものがこの青年には見出せないから。

己が定まらない相手が故に、彼女は彼にどう接すれば良いのかを、分りかねていた。

少し茶色掛かった短い髪は、流行だったので染めただけ。

肌も半端に焼けており、それは対策を塗ったり塗らなかつたりと曖昧な対応だったから。

骨格は整っているのに、それに見合う筋肉が無い。

服は無難な物を無難な色で。

表情さえも、笑っているのか呆れているのか。その境界が不透明。

首尾一貫した物が無いが故。曖昧模煳な存在が故。

葉月は草野了が苦手だった。

まあ、彼女は大抵のものが苦手な嫌いなのだが。



了がコップを台所に持っていくのと入れ替わるように、葉月は制服から着替える為に三階へと昇った。階段を上ると正面に一つ。その左奥にもう一つドアがある。葉月は自分の部屋である正面のドアに手を掛けると、

「ふむ？ 今日早いな、葉月」

声に葉月は振り返ると、タバコを銜えた一人の女性が居た。

古水こすい京子きょうこ。この事務所の持ち主である。

男性物のスーツに身を包む彼女は、短く揃えられた茶色の髪を揺らしながら葉月に近づいてきた。やり手の秘書みたいだと、葉月は思っている。

「ああ、終業式だったんだ」

「そうか、もうそんな時期か。つまり明日から暇なわけだな、お前は。なるほどね。だから和菓子屋から電話があったのか」

「俺にか？」

まるで値踏みをするような眼で葉月を見る京子。この女性は酷く目つきが悪い。

「お前しか和菓子屋と接点が無いだろう。了なんか論外だからな。まあ、もし私に有るとすれば、果たしあう時ぐらいなものだ」

物騒な台詞を平然と吐きながら探偵は苦笑する。年齢は葉月とさほど変わらないように見えるのだが、その仕草には年季が入っているように感じる。

「それで、用件は何だったんだ？」

黒い片目は探偵を睨む。十七という彼女の歳を考えれば、十分に凄味のある眼だったが、睨まれた本人はそれを何とも思わないよう。眼鏡奥の蒼い眼は少女を真芯に見据える。

「もし学校が早く終わって暇なら、早めに着てほしい。とのことだ」

どうでも良いことだと言わんばかりに、京子は煙を吐き出した。普通のタバコより少し長い平和の銘柄が、京子のお気に入りだ。その様を見て、葉月は素直に格好良いと思った。それこそ下の階に居る了なんかより。むしろ比べ物にならないとまで思う。

「分かった。にしてもお前、何でここに居るんだ？」

寝ていたわけでも無さそうなので、葉月は疑問に思った。

「ああ、ちよつと部屋の整理をね。今日からしばらく、しせい司生を預かることになってな、その準備をしていたんだ。曖昧とはいえ、アレは女扱いしないと機嫌を損ねる手前、了に周辺を整えさせるわけにいかなくてな。一人送られてきた荷物を解いていた所だ」

京子のその言葉に、葉月は司生の事を思い出す。去年に二度会ったことがあるが、確かに彼女のことだ。了なんかは自分の荷物を触られたと激怒するに違いない。彼女が記憶している司生という少女は、怒らせるのはタブー視される人種の一人だ。

ちなみに、彼女の中で怒らせてはいけないと特別視しているのは目の前に居る女性も入っている。この探偵は探偵で、色々曰くがあるのだと、彼女を取り巻く周囲が言っていた。

「脈の監理を代行してもらっている手前、断れなくてな。まあ、協会に司生なんか連れて行った日には、即日ホルマリンの中だ」

苦笑しながら物騒な発言をするのは京子のスタンスなのだと、葉月は聞き流す。

「もういいか？」

ずっとノブに手を掛けたままだった葉月は、うんざりとした声で問いかける。目の前の人間に気を利かせるといふ反応を期待した自分が馬鹿だったのだと悟った。

「ああ、構わないよ。むしろ、何故そんな格好で話をしているのか不思議だったんだ」

お前に引き止められたのだろうという言葉を飲み込んで、葉月は自分の部屋に入る。

中はすっかりピンク色になっていた。目が痛い、葉月は思った。ただでさえ、片目しかないんだ。あまり負担をかけないでくれとも。

「おい、京子。なんだこれ」

「言い忘れた。司生とお前は相部屋にすることにしたよ。歳も近いから相手してやってくれ」
二階にあるのと同じ黒皮のソファに置かれた、ピンク色のハートを隅に追いやり、葉月は溜め息と一緒に鞆を置いた。

コンクリートに打ち付けていた釘に掛かったハンガーは、代わりに動物のイラストの描かれたファンシーなドアフックに変わっており、少しだけ利便さが増していた。が。少しだけ彼女の心労も増した。

とりあえず制服を脱ぎ、動物の顎にハンガーに掛けていると、

「そうそう。司生の両親からも言伝だ。同衾まではしなくていいが、悲しんでいたらあやしてやってくれとのことだ。それじゃあ頼んだ。くれぐれも怒らせるんじゃないぞ？」

勝手に司生を押し付けて去っていく京子に、葉月の方がいよいよ怒る寸前だった。



添水そうずの音が聞こえる店内。空間には甘い香りが立ち込めており、甘味を求めて来店したとしても、黒糖や蜂蜜。餡の香りで、一時間もすればその香りだけですっかり満足してしまうだろう。

日比野探偵事務所から二キロほど北上した場所に、“桃源庵”とうげんあんはある。和菓子専門のこの店は、仕切りの高い茶会などで出される菓子を作っている傍ら、一つ百円の鯛焼き等も売っているため、学校帰りの学生達も頻繁に利用する地域に密着した和菓子店だ。

外装は茶室を改装したような造りになっていて、黒い大理石の床に店内の隅には石灯籠などが置かれ、非常に高級感が漂う内装になっている。

透明な陳列棚の奥から、店の特徴とも言える香りが漂っており、奥に厨房があるということが分かる。一般客が入ることはないが、その厨房を抜けると中庭には、本物の茶室があるらしい。というのも、葉月がその存在を見たこと無いので確証が取れていないだけ。無論、取ろうとも思っていないのだが。

そんな桃源庵の店主は現在二代目で、そろそろ隠居したいのだが、和菓子なんて昨今はやらないと家を飛び出しパティシエを目指している息子のせいと、それが叶わないのだと、愚痴を零すのが日課になっており、それを聞くのも仕事の内となっている。

「それで今日、シセイが来るのですか？」

客の居ない店内は、スピーカーから流れる水と竹の音に耳を傾けるでもない店員が、会話を楽しむ時間になっているらしい。

冗談のように美しい、銀の髪をアップにした女性が呆れた声で葉月に話しかけた。

ミディ・ノートム。

染色していない本物の銀髪。光の強い緑の眼。明らかに日本人ではない彫刻のような顔。女性にしては高い身長。それに見合う豊かな局部。

なんと美しい出で立ちだろう。ただ、女神のように美しいその女性の手だけは、常に荒れている。それは彼女の職業のせい。和菓子職人の見習いという境遇が、完璧な造詣を許してはいない。ただ、そんなことは些細だと笑い飛ばせるだけの美しさを持っていることに変わりはないのだが。

相変わらずエプロン姿が似合わない、葉月は包帯で隠れていない眼で彼女を見た。

この女性にはこのような出で立ちではなく、それこそ貴族か何かを着るようなドレスこそが似合うと、葉月はいつも思っている。

大抵のものに無関心な葉月だが、美しいものには興味があるようだ。故に彼女はアルバイト先の桃源庵に行くたびに、このバイト先の先輩であるミデイに心の中で嘆息するのだった。ミデイの年齢にして二十七。十五のときに日本に来日して、和菓子に惹かれた彼女は帰国後、どうしても日本に居たときに食した和菓子の味が忘れられず、日本へ永住する覚悟で職人になるための修行をしているのだと、本人から聞いたことがある。

ちなみに同い年の京子とは大猿の仲で、過去に色々あった様子。何でも日計七不思議の一つには彼女が関係しているのだと、会話に上っている司生から聞いたことがあった。

「ええ。帰ったら勝手に同室になってました」

「まったく。本当に勝手ですね、あの陰気探偵は」

無駄に流暢な嫌味を吐くミデイに葉月は呆れた。曰く、この人は口喧嘩をする為に二ヶ月で小中高生にて学ぶ、生きる上で言葉に不自由しない程度の語学を身に着けたのだという。来日する前に最低限の日本語を知っていたとはいえ、呆れるほどの行動意欲だ。それほどに京子から言葉に関してからかわれることが嫌だったのだろう。今では人名のアクセントと多少の常識を除けば、ほぼ完璧に日本で生活できるレベルだという。

「それで、ハヅキは仕事が終わったらどうするのですか？ 暇なら少し試食をしてほしいのですが」

ミデイは先月から、ようやく商品の一部を完全に任せられるようになった。もちろん、この店を代表する水羊羹みずようかんや外郎ういらう、金鏢きんつばなどの餡を使う芸術品ではないが、それに近しい大福や学生の味方である鯛焼きなどを任せられるようになった。そして、桃源庵の二代目、椀田かばた正則まのりから期間限定品ではあるが、新作和菓子の考案をミデイは任せられたのだった。

彼女の張り切りようは目を見張るものがあり、時折自信のある菓子を、バイトの仲間全員で試食をする。

「すいません。非常に魅力的ですけど、帰りに学校へ行こうと思ってまして」

「ああ、ユメに会うのですか」

頷く葉月。いつも決まった時間にそこに行くのが彼女の日課だった。

「それではユメと一緒に」

と、彼女は厨房の方を指差す。テーブルには紙袋。どうやらあの中に彼女の考案した新作

が入っているらしい。

「はい、少しかだけ貰っていくことにします」

葉月はそういうと同時に、店には学生服を着た女性が二人訪れた。

それから約四時間。葉月は探偵の悪口や、京子への怨み辛みや、重度喫煙者への罵詈雑言を聞きながら仕事に励んだ。



「こんばんは、葉月」

外壁にうさぎと満月を確認しながら、葉月は保健室の隣に入る。中にはやはり、かぐや姫が居た。

腰まで伸びた黒い髪は絹。風が吹けば、煙煙けむりけむり、と音を立てるに違いない。

穏やかな黒の瞳。真珠の肌。枝のようになやかな振る舞い。白い白衣。なるほど。美に無駄がないという意味では、彼女は日本人形のようなもの。浮かべる表情は常に明るく、人を笑顔にさせることに關しては天分の才を持つ。

姫君の名を、天音あまね夢ゆめ。

日計高校(中学も含む)の心理カウンセラー。学生の悩みなどの相談に乗ることを主にしている臨床心理士。

常に笑顔を絶やさない彼女のせいで、ここの学生は大抵年上が好みになると、同級生が漏らしていたのを葉月は思い出した。

彼女から微笑みを受けながら、葉月は挨拶を返す。

午後六時。既に今日の勤務は終わっており、その証拠に入り口はカーテンで閉まっていた。室内は簡素で整頓が行き届いているが、棚には乱雑に書類が並べられている。欲しいときに限って書類が出てこない現場を、葉月はよく見ている。

部屋の隅には観葉植物。二つの色違いのテーブルは、パズルのように組み合っている。

「ミ、デイさんからこれを」

葉月は紙袋を天音に手渡すと、白衣の女性は微笑んだ。

「わあ、それじゃお茶にしようか」

彼女は電気ポットで急須にお湯を注ぐ。

ちなみに、彼女のスタイルが白衣なのは義務なんかではない。生徒に第一印象で舐められないために、あえてそれを着ているらしい。ちなみに、本人は知る良しも無いが、それが彼女の人氣に拍車を掛けているのだそうだ。

「最近どう?」

急須から陶器に緑茶を注ぎながら、天音は問いかける。気にかけるのは癖なのだろう。

「今日から、司生が事務所に来ます」

「へえ。しいちゃんが？ 相変わらず急だね」

天音は苦笑しながらお茶を葉月に勧め、紙袋を物色する。

「うわ、何これ。緑、の？ おはぎ、かな？」

小さなタツパに四つ入った、楕円のまりも毬藻のようなそれから、確かに餡と緑茶の匂いがした。ミデイの新作は、どうやらおはぎのようだ。

とりあえず、試食を兼ねているのだと言い聞かせながら、二人はそれを食す。ほんのり緑茶の香りが鼻を通った。

「それにしても、最近天音さんの方はどうですか？」

「そうだね。最近は少し忙しいよ。まあ、毎年この時期はこうなんだけどね。ほら、夏は受験生にとって勝負の時期とか言われてるじゃない？ だけどまだ進路とか決まってる子とかが、ね。そんなに気に止むこと無いのに。あの京子だってぎりぎりになるまで進路決まらなかったんだし」

天音の発言に葉月は少し驚いた顔をした。何でもそつなくこなすイメージがあった手前、そのような時期もあったのだということに、葉月の知る京子の印象が少しだけ変わった。

「少し意外です」

「でしょ？」

天音は笑った。そして遠くを見た。まるで過去を懐かしむかのように。ただ、その表情には少しばかりの哀の色が入っていたことに、葉月は気がつかなかった。

「でも、決まったら早かったんだよ？ 日計中学を卒業してすぐにヨーロッパに行っちゃってね。それから私が二十歳になるまで会えなかったし。九月くらいだったかな？ ひよっこり私の家に来てさ、よう、なんてタバコを吸いながら現れるんだもん。びっくりしちやったよ」

それは京子らしいと、葉月は思った。彼女はそのような突飛な人物でなくてはならないとも。

そしておはぎを食べ終わり、残った二つは事務所に持ち帰ることになった葉月はタツパを紙袋に入れながら、

「それじゃ、やろうか？」

という天音の提案に頷いた。

その後二人は軽装に着替え、いつもの日課に取り掛かった。



「あっ、葉月だ！」

葉月が事務所に戻り二階のオフィスに向かうと、名前を呼ばれた。

なるべく怒らせないようにと言われている手前、無視するわけにもいかず、葉月は白い少

女に返事をした。

さて、その少女をどう表現したらすれば良いだろうか？

もし少女が雪の化身であれば、人間味を帯びすぎている。

白い髪。白い肌。白い瞳孔。無垢な少女。アルビノ

彼女の名前は成神 なるかみ しせい 司生。

十に届くか否かという外見。彼女こそ昼頃から話題を集めていた少女だ。

やはり白い頬は少しだけ紅が引かれている。いや、軽度の炎症を起こしていると表記した方が正しいか。

「お前、それ大丈夫なのか？」

「うん、もう夜だもの。平気よ」

分かつてはいたが一応心配していたポーズを取る葉月。まるで腫れ物を扱うような対応だ。それに引き換え、少女は素直に微笑んだ。きつと葉月が心配してくれているのだと感じたからだろう。

「それにしても、遅かったんだな」

「ええ。迎えが遅かったの。本当に京子の助手は無能ね。ううん、葉月のことじゃないのよ？ ぜーんぶ、了のことなんだからね？」

自分を気遣ってくれる司生に、葉月はつい苦笑した。それに釣られるように、司生も笑った。

さて。可笑しいとは思わないだろうか。

葉月の目の前に居る成神 司生はアルビノである。瞳孔まで白い彼女が何故、視覚補助（この場合は虫眼鏡や双眼鏡）を使わずに葉月を認識し、空間を共有することができるのだろうか？

確かに、消去法から来る人物特定なのかもしれない。

確かに、欠伸等と同じように雰囲気の共有によるものかもしれない。

だが、少女の対応はそのようなものではなかった。

司生は葉月を目で補足して断定したし、彼女が笑うのを見て同じようにした。

それは可笑しい。この場合は過剰に光を取り込むことによる視覚の低下（視覚の妨害とも言える）なのだが、彼女は二メートル以上離れた場所から、葉月を確認している。

さて、この奇怪な状況。どういう種が仕掛けられているのだろうか？

これを説明するには、一つの隠匿を暴かねばならない。

それは、

——この世界には、魔法が存在する。

という揺るぎ無き事実。

確かに魔法というものは実在しないというのが、現代の共通見解だ。

科学の発展し、あらゆる不可思議が単なる事象へと成り下がる現代。相対性理論、量子力学などを駆使し、あらゆる事象に説明付けが成された今。機械が社会に蔓延し、電子による架空世界すら人の手により運営されても尚。魔法は存在している。

科学が開かれた世界への標だとするならば、魔法は隠匿された世界への導。道は違えども、共に世界に属する理の一つ。

架空を否定するのが科学なら、架空を許容するのが魔道。

ただそれだけの話。

誰にも開かれた道ではないが故に、この現代から見放されているだけで。

世界には、魔法は未だに息づいている。

隠匿される理が故、絶対数が少ない故、誰もが知るものではないだけである。

証拠に未だ魔法という言葉が存在するし、ごく自然に一般はその存在を受け入れている。

それは、太古から魔法というものは存在し、人はそれと共存してきたが故の結果である。

——ただ断言する。科学が魔法すら解き明かす未来が、必ず、訪れるだろう。

これは遅かれ早かれ避けようのない事実。

現在こそ、マナやオド、エーテルというような架空要素を、観測できない科学者が、観測できるが解明しない研究者が、志半ばで倒れた探求者等が居るだけで、それが表舞台に出てきていないだけなのだ。

こればかりは生まれ持った資質なのでしようがないと言えるが、将来的に必ず、魔法は解明されるだろう。

だがそれは決して、今ではない。

そして、葉月の目の前にいる少女もまた、十にも満たない年齢で魔術に身を寄せるもの。眼前の光を屈折させる魔術。空間に眼鏡のような役割を持たせる魔術。

実に初歩的な、屈折、の概念を用いた魔術だ。

これこそが、少女が葉月を確認しているカラクリである。

「おいおい、了が私の助手とは聞き捨てなら無いぞ。アイツはパシリだ」

葉月の右奥で机に足を投げ出して新聞を読んでいた京子は、訂正だけすると新聞をめくった。本当に用件はそれだけだったらしい。

「ちよつと、それも聞き捨てなら無いですよ、京子さん」

台所から怒声が飛んだ。

「まあ、そうよね。この街の、しゅとこうそくを壊したような野蛮人と、虫も殺せないような了がそんな関係なはずないわよね！」

弾むように司生は新聞紙に向かって笑った。実に無邪気な笑顔なのだが、どこか小悪魔のような妖艶さも兼ね備えた笑みだ。

少女の発言に、京子は黙秘を決め込んだらしい。新聞の奥からは煙があがっている。

「さつきから散々だなあ」

聞こえるか聞こえないかという具合で、了の呟きが葉月には聞こえた。いや、正確には全員が聞こえていたのだが無視を決め込んでいるらしい。

まあ、彼はそのような立ち位置に居ることが多いため、あまり気にしていないようだが。

「ねえ葉月。上でお話しましょ？」

その司生の提案に葉月は引きつった笑顔で頷いた。

彼女はこの少女も苦手なようだ。

翌日、日比野探偵事務所に半月ぶりの来客があった。

来客主の名前を渡井 恭一わたい きょういちと言う。

「それで、ご依頼の内容とは？」

草野了が渡井に麦茶を出す横で、京子が実に面倒くさそうに、対面する男の個人情報記入された紙を眺めながら問いかけた。来客時にも煙草をやめる気は無いらしく、煙が天井へと上がっていく。

「はあ。この事務所に行けば事件を解決してくれると聞きました」

見た目六十台の渡井が、これまた見た目二十台前半の京子に緊張をしている構図に、部屋の隅に立っている葉月は苦笑した。

「いやいや、事件を解決するなんて大層なこと私にはできませんよ。事件の解決なんて警察の仕事ですからね。一介の探偵に過ぎない私には荷が重いです」

ガラスで出来た灰皿に煙草を押し付けながら、実に胡散臭く笑う京子に、よく言うと葉月は思った。

「はあ。でも、ここを頼るように言われてきた手前です」

「ふむ？ 誰からの紹介です？」

「すいません、名前が分からないんです」

紹介の癖に紹介相手を知らないというこの男に、卦体な話だと葉月は眉を顰めた。京子も同じように何かを思ったらしい。とりあえず渡井に話を促す。

「はあ。少し長くなりますが——」

そのいちいち自信の無いような物言いに、葉月は苛々とし始めていたが、ようやく話が本題に入るようだ。

そして初老の男はやはり、ぼつり、ぼつり、と語り始めた。

「その紙にも書きましたが、わたしは以前村長をやっております。いや、もう合併されてしまってもう村長でもないのですが。はい。それですね。しばらくして、わたし、大変申し上げ難いのですが、殺されてしまいました」

それを鵜呑みにすると、京子たちの目の前で語っている渡井は死体ということになる。

死体操作の類だろうかと葉月は考えたが止めた。渡井が続きを喋りだしたからだ。

「いえ、信じてもらわなくてもいいのですが。その際に助けてもらった恩人から、ここに行くよう言われたわけです。急なことでしたので、名前を聞くのを失念しておりましたし、わたくしも当然ながら混乱してしまって、はい」

殺されて助けられた。つまり、この渡井という男は死から蘇ったことになる。いや、殺されたというのは比喩だ。殺されかけたが助かった、というのが正解だろう。

だが、例えば過去の陰陽道には死者の蘇生は存在する。

かの安倍晴明も一度首を切り落とされ死んでいるが、師である白道上人の【生命存続の法】

により復活を遂げている。

しかしそれは、人間の段階ステージを超越した人の所業であることは間違いないし、過去ならいざ知らず信仰の薄れた現代では、そこまでの奇跡を行使できるものは存在しないだろう。

確かに南北アメリカなどにはヴードゥーという魔術大系が存在し、人を殺しゾンビ化させて使役することができる粉、ゾンビ・パウダー、というものが存在するが、目の前の渡井という男にはそういう不自然な生を感じる事が出来ない。

使役されている者は、必ずそのような兆候がある。例えば先ほどの粉を使った使役であれば、まずは対象を殺してから解毒して使いにする。つまりは一度殺すが故に、目は胡乱となる等の特徴が必ず出るのだ。

形は違えど動く死体という意味では、伏見中納言師仲も骨を繋いで生き返す反魂の法を得意としていたわけだが、葉月本人はそちらに明るくは無い。

どちらにせよ。蘇生とは安易に行えるような儀式でないのだ。

以上のことからこの渡井という初老の男は殺されてはおらず、命からがら助かったのだらうと葉月は考えた。

「ふむ。まあ、いいでしょう。それでは、貴方を殺した人物について、何か心当たりは？」京子の睨みの利いた眼に渡井は一瞬怯んだが、すぐに持ち直し話し始める。

「実は、私どもの村の者だと思っております。合併する前の、今の和田栗市ではなく、祖宇津村そうつむらの者だ」と

そういうと初老の男は溜め息を吐く。その仕草がどうにも葉月には気に入らなかった。「なあ、村長だったアンタが同じ村の奴に殺されかけたって、よっぽどだろ。恨みを買うようなことしたのか？」

「こら、葉月！ それは失礼だよ」

彼女の隣に待機していた了の注意に、葉月は睨みだけを返した。

しかし、渡井は何も思わなかったらしく、葉月にくたびれた笑みを浮かべた。

「ええ、貴女の言う通り。きっと復讐のつもりなのでしょう」

「——詳しく聞かせてもらえますね？」

京子の問いに、渡井は静かに話し始めた。



「ええ、祖宇津村には様々な伝統行事がありました。中には祖宇津岬で行われる漁魂祭りょうこんさいなど行時もあるのですが、それは観光客を呼ぶいわば表向きのものでして、中には村人しか知らない物もあります。その一つに一年の豊作を願う祭り、いえ、行事があるのです」

「ふむ。山口の稲穂祭り、岐阜のどぶろく祭りみたいなものですね？」

京子の例えに渡井は頷く。

「そのようなものと考えてもらってよろしいのですが、ただ、そこまで有名ではありません。本当に地元の者しか知らない祭りで、始まるのも夜からなのです」

確かに少し珍しいと葉月は感じた。豊作を祈るのであれば日中でなければいけないはず。作物を育てる日の光が落ちてから始まるのは、あまり聞かない気がした。

「非常に言い難いですし、皆様からすれば非常におぞましいと思いますにられるかもしれませんが、我々のその祭りは——」

一向に進まない話葉月が苛立つっていると、それを感じたのか、渡井はようやく、

——村の巫女を、村中の男で犯すのです。

と呟いた。

「なるほど。それは非常に原始的であり、確かに有効な儀式でもありますね」

面白いとばかりに京子は口元を引きつらせながら、硝子の灰皿に半分ほど残っていたロングピースを押し付けた。

「驚かれないのですか？」

その事にこそ驚いたとばかりに、渡井は京子を見た。

「何故驚く必要があるのです？ 確かにそのような風習が今の今まで残っていたことには驚きますが、結局は豊作の神を対象とした、所謂シャーマニズムですし、セイズ魔術だ。

性行為という面で気兼ねがあったのかもしれませんが、日本にだって立川流という性を用いて仏となる真言密教がある。いや、性魔術に関していえば西洋よりアジアの方が強い。

中国の房中術や、チベットのタントラ派左道密教など——つと、長くなるので省略しますが、性行為という面での気負いがあるなら、我々に気を使っていたただかなくても結構です。

ここに居る我々は、限りなくそちら側の存在なのですから」

京子自身も彼の話し方が苦手なのか、渡井に捲くし立てた。

ただ、渡井には彼女の話しした単語の半分は分からなかっただろうが、そのニュアンスが通じたらしい。

今度は少し滑らかに話を再開させた。

「——この祭り。いや、伝統の目的は確かに豊作を願うものです。ですが、今でこそこのようなおぞましいモノになってしまいました。最初は村の男総出ではなかったのです」

「徐々に形が加えられていくことは、儀式には良くあることです」

京子は硝子テーブルの上からタバコのケースを取ると、マッチで火を点けて煙を吐く。天井が少し黄ばんでいた。

「そう。最初は総出ではなかった。いつからでしょう。あの儀式は神との交信を目的としていたはずなのに。いつからでしょう。あの子はきつと怨んでいるのです」

「あの子とは？」

京子が問いかける。

が、一向に渡井からは返答が無い。

その代わりに。

「ああ、分からない。神が。凶作が、ああ。違う。あの子は何を。だが許されない。何が。私は。悪い。ううあ神が。創ろう。全て。曼陀羅。神社。全ての神。凶作。禁忌に。あの子。ああ。あの。黒。だ。ああ、真理。真理。真理が！」

渡井は呻く。

その様子を見て呆気に取られる三人。

そして、皆が見る前で。

渡井の右頸動脈から、まるでスプリングラーのように、赤い血が霧状に事務所を舞った。

了はその光景に、ひい、と竦み。

葉月は呆然とその光景に見入り。

京子は血を浴びながら煙を吐く。

三者三様の反応後、渡井は物言わぬ噴水と化していた。

「——真理ねえ」

京子は呟くと、着ていた白かったスーツを脱ぎ始める。

「まったく、不愉快な爆弾だな。おい了。タオルと雑巾だ」

その声で我に返ったのか、了は悲鳴に近い返事を上げて事務所へと入っていった。京子の後方に居た二人にはあまり飛沫が掛かってはいない。

「おい、葉月。見えてたか？」

不機嫌そうに葉月に問う京子は、赤く湿気たタバコを灰皿に放る。

「無茶言うな。お前が見えなかった物を、俺が見れるか」

「ふん。まったく忌々しい事この上無いな」

京子は愚痴りながら、スーツをソファーに投げ捨てた。

「葉月、依頼人が死んだ原因を探れ。この件を放置するにしても、報告するにしても、概要すら分からんまま放っておくのは気持ちが悪い」

「俺がか？」

「この部屋に葉月なんて名前はお前以外居ないだろ？」

「了にやらせればいいだろ」

葉月は年齢に不相応な眼で京子を睨む。

「了はこの部屋の掃除に使う。私はシャワーを浴びた後にあの死体を処理する。それとも何か？ お前が代わってくれるのか？」

その言葉で、葉月の威勢は削がれしまった。

「適材適所というやつだ。何なら司生を連れて行って構わんぞ。どうせアイツも暇だろうからな」

京子はそういうと了の入ったドアとは別の方向。上の階へと続く階段のある方のドアに手を掛ける。

「おい待てよ。原因を探ろうにもどうしろって言うんだよ」

「そうだな。先ずはその爆弾が言った祖宇津村。いや、和田栗市にでも行ってみる」

京子はそう言うとドアの向こうへと姿を消した。

葉月は一人、何をするでもなく一度だけ死体を見ると、多少震えのする手を冷房のせいにして京子に続いた。



「ふうん。それでここに来たのね」

葉月の隣で司生がワンピースを翻しながら呆れた。

電車に乗ること二十分。葉月たちは事務所のある日計市から和田栗市へと到着した。

景色を物珍しそうに眺めていた司生に、これまた独り言のように呟きながら（事が事だけに大声で語るものではないのだが）概要を説明した葉月に、電車を降りた司生が最初に言った言葉がそれだった。

その口調から、どちらが年上か分からなくなってしまっただが、明らかに葉月のほうが背格好は大人びている。無論左目は包帯で隠しているため、物々しい雰囲気ではあるのだが。

「京子が暇しているだろうから連れて行けと言ったんだ。俺の意思じゃない。」

「ううん。怒ってないわ？ 本当に暇だったんですもの。むしろ感謝したいくらいよ。でも昨日の夜、ベッドで話した占いの施設には後ろ髪引かれるけどね」

司生はそう言うと、白く長い髪を靡かせながら葉月の周りを、くるくる、と周る。

「うん。外をこう歩くなんて久しぶり。お父さんとお母さんは心配性だから」

緩やかな坂。空には緑が手を伸ばし、空を隠していた。葉の隙間から零れる光に眼を眩ませながら二人は坂を上る。

この上には、渡井の住んでいた家があり、二人はそこを最初の目的地とした。

「そりゃあ、お前」

「うん。私の体質だと常に太陽の下っていうのは良くないんだけどね。でも、私は月より太陽の方が好きよ？ だって、夜は怖いもの」

よく言うと、葉月は思った。

お前の方がよっぽど怖いとも。

「何で怖いんだ？」

とりあえず話しを繕う葉月。邪険にははいけない相手であるし、話の腰を折るのも何だかんだで可哀想だと思っただからだ。

「だってツクヨミは何をするでもないんだもん。役目の無い神様なんて、なんだか怖いわ」
「まあな」

「でも、今は昔より、ほんの少しだけ夜が好きになったの」

「なんだそれ」

先ほどの会話と打って変わった発言に、葉月は思わず呟いた。

「ふふ、内緒！」

十にも満たない少女はそういうと、小走りに坂を駆け上っていく。

葉月はそれに溜め息を吐いて空を見た。

酷く快晴な天照にもう一度溜め息を吐くと、少女を追う為に走り出した。



渡井の表札に呼び鈴を鳴らすと、出てきたのは大学生くらいの女性だった。

年齢的に娘ではなく孫なのだろうと葉月は勝手に決めつけながら、話を聞く。

「どちら様で？ 探偵、ですか？ 本当に？」

葉月の背格好を見て、少し訝しげな雰囲気になった女性は、舐めまわすように葉月を見た後に、同じように司生を見た。

確かに少女二人が急に探偵だと名乗っても、説得力に欠けている。

「おじいちゃんの日課？ そうね、確かよく神社に行ってたかな」

子供なのが幸いしたのか、田舎特有の疑いの無さなのか、質問にはきちんと答えてくれるよう。この際探偵かどうかはどうでも良いことだと、葉月は続ける。

「何を？ うーん、良く分からないけど、私のおじいちゃんは前村長だったから、神社を会議所代わりに色々してたんじゃないかな」

神社。つまりそこで、儀式は行われていたのだろう。

「えーっと、場所、場所。ほら、いつもお祭りをやってる奥の、え？ 知らない？ この子じゃないんだ？ えっと、ここを——」

道を教えてもらい、葉月と司生は女性に礼をする。

「ああ、ちよっと待って」

去ろうとしたのを呼び止められ、

「おじいちゃん、三日くらい帰ってないの。もし会ったなら連絡するように伝えて頂戴」

二人は何と返して良いか分からず、会釈をした後にその場を去った。

来た道を下りながら、神社へ向かう二人。

微妙な沈黙が二人を包んでいた。

「どう思う？ 葉月」

「何がだ？」

「さっきの。おじいちゃんは死んじゃったって伝えるべきだったんじゃないの？」

それに少し間を置いて、葉月は自分の少し後ろを歩く司生を盗み見た。

少女の顔は案の定うかない。

「でも、見ず知らずの俺たちがそれを伝えるのもどうだ？ しかも何か？ おじいちゃんは急に爆発するように死にましたって？ ——言わない方がいいんだよ、きつと」

「——うん」

面倒くさいと葉月は思った。

寝起きから死体を見ても動じもしなかった癖に、こういう場面で泣きそうになる司生の扱いが、酷く煩わしいものに見える。

確かに司生の方が葉月より魔術的な知識は豊富だろう。だけどこんな風になるなら一人の方が気楽だとも。

「行くぞ司生。次は神社だ」

急に萎れた少女の手を取って、二人は坂を下る。

手が濡れて気持ち悪いと葉月は、ぼう、と思った。



両脇に緑が掛かり見え辛くなっている鳥居を潜り、急な斜面のせいで、息も絶え絶えになっている司生が二百五十六を数え終わると、そうつてんしょうぐう祖宇津天照宮という神社にたどり着いた。

葉月がゆっくと赤が剥げつつある、木製の鳥居を八つ潜る頃には、司生は鐘を鳴らして手を合わせていた。

七月後半の現在。幾ら天井が緑で覆われていようと蒸し暑く、彼女の包帯の下からは一筋の汗が流れている。

彼女の隣では司生が、同じように汗を流しながらも、物珍しそうに、きよろきよろ、と辺りを見回している。

「お参りに来たんじゃないんだぞ」

「でも葉月。神様の通り道を堂々と歩いておいて、お参りもしないなんて失礼じゃない？」先ほどまであんなに暗かった癖にもう持ち直している少女に、葉月は苦笑を漏らした。

「ならゆっくり通行許可でも申請してろ。俺は少し周ってくる」

手を合わせる少女の姿を確認して、葉月は茶色い砂利を踏みしめながら拝殿の外壁、周囲

を注視する。

二分も掛からずに一周した葉月の感想は、高床式倉庫のような建築物だというもの。拝殿の前にある賽銭箱の奥に伸びる木製の階段は、葉月の身長よりも長く、屋根付近から伸びた柱から鈴がぶら下がっている。拝殿を拝もうにも階段が邪魔をしてそれが出来ない。確かに、頂上からは神の視点が得られるだろうと、葉月は思った。

観察の為に二週目に入ろうとして、葉月の後ろから司生が追いついた。

「ねえ。ここの本殿ってどこのなの？」

自然に葉月の内心を司生が代弁する形となった。祭祀や拝礼するための拝殿はさつきから彼女が周回している建物に間違いは無いのだが、御神体が収められている勧進の本殿がどうしても見当たらなかった。

確かに拝殿より目立つものではないとはいえ、彼女達が立っている場所は小高い吹き抜けであり、拝殿の裏はすぐに緑が茂っているだけだった。

「まあ、こう小さい神社だ。無くても可笑しくは無いだろ。これが本殿かもしれないしな」
「——賽銭箱とか鈴があるのにな？」

会話は続かないまま二人は賽銭箱を通り過ぎ、建物を左回りに歩く。最初は社殿を注視していた葉月は、一部の茶色い砂利に白い砂が混じっているのに気づいた。

葉月が無言で指を指すと、司生もそれに気づいたようで小走りにその場所まで駆け寄り、しゃがみ込んだ。

「何でここだけ違う砂が混ざってるんだろう？」

「お前が分からないのに俺が分かるか。本当に何も分からないのか？」

「——別にいいけどさ」

司生は一言だけそう呟くと、静かに目を閉じる。

きっかり二秒後、再度目を開けた瞬間に白かった司生の瞳孔は、まるで別物のように黒くなっていた。

「えっと、大分時間が経ってるみたいだから詳しくは分からないけど、これって水晶よ」

「こんなところにか？」

「うん。それに少しだけ魔力がある。何かに使われた後みたいけど——」

司生はそう言い終ると目を閉じ、元の白い瞳孔に戻った。

葉月はそれを確認し終え、司生を立たせようと手を差し伸べる。素直に手を差し出す司生の手は、酷く華奢。力を込めれば折れてしまうだろうと彼女は思った。

「おい、大丈夫か？」

それは、立ち上がることを促す葉月の力に対し、司生の反応が多少鈍いことによる心配だった。

「うん、平気。ちょっと太陽の下に居すぎたかも」

司生のそれは、夏の真っ盛りに太陽光を屈折させ続けるが故の疲労。

先ほど予定外の魔力を使わせたことの引け目も感じていた葉月は、少し休憩するか、と空まで伸びる拝殿の階段に司生を座らせ、自分も隣に座った。

しばらく二人が休憩していると、

「おや、可愛らしい参拝さんですね」

彼女達の後ろから声が出た。

◇

ひい、という間抜けな悲鳴を聞きながら、京子は事務所で本を読んでいた。いや、先ほどからページが進まないところを見ると、単に本を開きながら考え事をしているだけのようだ。

そのことに気づいたのか、京子は苦笑を漏らしタバコに火を点けた。

タバコに火を点けて、煙を深く一吸いだけして灰皿に押し付ける。勿体無いように感じるが、それが彼女の好む吸い方だった。

タバコは自分のゼンマイのようなものだ、京子は考えている。

これが何事においても原動力ないし、行動を始めるための起因となっているからだ。

「さて、どうしたもんかな」

再度吸おうと箱に手を伸ばすが、灰皿の一本が最後だったと気づくと彼女は悔やんだ。

意識せずに吸ってしまったばかりにすっかり手持ち無沙汰だ。

代わりに珈琲でも飲もうと、隣の部屋に居る了を呼ぼうとして止めた。

彼女の助手が、先ほどから小さな悲鳴を漏らしながら隣の部屋に居るのは、床一面に波打っている血の池を掃除しているからだ。

そんな奴が入れる珈琲なんぞ飲めないと、京子は渋々台所へと向かう。

彼女の机と台所は丁度北と南に位置しており、広くは無いが決して狭くも無い事務所においての最長の距離である。

そのため彼女が普段台所へ行くことは少ないのだが、無論時と場合による。

タバコが無いのだ。手持ち無沙汰を解消する意味でも丁度いいだろうと、京子は言い訳しながら台所へと向かい、珈琲を淹れた。

自分の机に戻る途中、ジリジリという音が部屋に木霊する。

葉月の机に乗っている黒い電話が自己主張をしている音だった。

「お電話ありがとうございます、日比野探偵事務所、古水です」

珈琲を片手に業務用の声で京子是对応する。

受話器からは聞き覚えのある笑い声が出た。

「わはは、お前もそんな声が出せるんだな、魔女！ いやー、愉快、愉快！ そうだな、もう一回さっきの台詞を言ってくれ、録音して笑うから！」

「――総解。何のようだ。お前の声は耳に毒だから黙ってくれ。それに、いい加減歳相応の落ち着きを見せたらどうなんだ、まったく今年でお前いくつだ？」

「四十二でござるよ？」

「その歳でそんな調子じゃあ、もう手遅れだな。一回死んだ方が良い」

「お前さんもまだ二十そこらでそんな落ち着いてどうする？ 人生面白いかな？」

「二十七だ。それに、そんなのお前に関係ないだろう？ で、いい加減何の用だ？」

「用が無ければ電話しちゃいかんのか？」

「気色悪いこと言うな、じゃあな」

京子はそう言うと、乱暴に受話器を置いた。

叩きつけた後に受話器を置いた際に鳴る、チン、という音は多少の虚しさを演出する。

そしてその数秒後、チン、という予告の後に、ジリジリ、と黒電話は自己主張する。

「――お電話有り難う御座います、日比野探偵事務所、古水と申します」

「録音しちった！ いやー、良いもん録れた録れた！ つうか、ちゃんと最初の感じで対応しろよお、あつきらかに不機嫌じゃんかよー！」

「死ね！」

「御免仕る！」

二人がそんなやり取りをしていると、事務所の向こうから、キヤー、という叫び声が出た。

「五月蠅いぞ、草野！ いい加減慣れろ！」

明らかに苛々しているのだろう、京子は受話器を再度叩きつけ、チン、という音が間抜けに響いたあと、理不尽に叫んだ。

ガチャ、という音の後、すいません、と声が出た。

その声に振り返る京子。血の池が広がる部屋から肩口まである黒髪の女性が立っていた。

「えりるか。どうかしたか？」

「いえ、総解様の使いで来たのですが、連絡は行ってませんでしたか？」

困ったような顔をする女性に、京子は、あー、と声を漏らした。

用件はこのことだったのだと。

「話にならなかったが一応電話が着た。それで、何の用だ？」

「こちらをお持ちするようにと」

えりる、と呼ばれた女性はそう言いながら風呂敷を広げる。その仕草はいかにも女性らしく柔らかだと、京子はぼんやりと思った。

風呂敷の中には、クリップで纏められた二種類の分厚いコピー紙の束があった。

葉月の机に持っていた珈琲カップを置き、それに手を伸ばす京子、一つの書類を斜め読みして、ああ、と呟いた。

「律儀にこんな重要なもの公開するなんぞ、アイツも可愛いところあるじゃないか」

「失礼ですが、それはどのようなもので？」

いつの間にか台所から出てきたえりるから、暖かい珈琲カップを受け取る京子。どうやら先の電話で冷めてしまった珈琲を淹れなおしてくれたようだ。

こんな気配りがアイツにも出来たら、とドアの向こうで血の池と格闘する了に苦笑した。

「うん、これはカバラと錬金術の相極図だね。お前の雇い主である横道おうどうそうかい総解を天才とたらし

める一つの奥義書さ。内容はざっとしか見て無いけど、どうやら総解は、不定形ゴイレムなものの真

理を錬金術に求めたらしいね。大宇宙マクロコスモと小宇宙ミクロコスモを真理としてな」

「難しいですね」

「考え方は単純だがな。まあ、やってることは恐ろしく非凡だ」

京子はというと珈琲を口に含む。

燻された豆の香りが鼻を抜けた。

「もう一つは人工知能、AI、についてだな。こちらのほうが私の目当てだったんだが、まあこれ以上は差し支えるだろう。こんな簡易だが、一応は奥義だ。易々と喋るもんでもない」

「そのようなものを、何故京子さんが？」

「なに、アイツとは一つ賭けをされていてね。賭け事が不得意な癖に酷く好む、アイツの担保を切り崩し続けた結果だよ」

京子はというと、二つの書類からクリップを外して、シュレッダーにかけた。

奥義書だといっておきながら、あまりの執着の無さだ。

「それにしても、何故そのようなものを？」

京子さんご自身の魔法大系とは縁遠いはずですけど、えりるは結んだ。

「ほら、自分の弟子のことぐらいちやんと知っておかないといけないだろう？ お前たち修道の屋敷の連中は普通の魔術師じゃないからね、突飛なものばかりが出来て、基本がすっかり抜け落ちている。とりあえず原因を作った総解にそのボーダーの位置を求めたんだよ。何が出来て、何が出来ないのか、をね」

それに、お前は私の自慢の弟子なんだから、とどこか痒そうに京子は言った。

「そういえば、隣の部屋が凄いいことになっていたんですけど？」

恥ずかしさを隠すように、えりるは話題を変える。気になっていたが京子があまりにも自然としていたので聞きそびれていたというのが正解か。本来なら真っ先に出ても良いような内容である。

「ああ、ちよつと朝から不愉快な爆弾が贈られてきてね。おかげで文財に一つ借りを作ってしまった。流石に死体の処理は手に余る」

「爆弾ですか？ —— 了さんは居ますから、まさか——」

「それこそ真逆だよ。爆弾は比喩だ。今朝に来た依頼人が爆発してね。いや、頸動脈が裂け

ただけなんだがね。まあ、何にせよ不愉快には違いない」

「——はあ」

つくづく、この人は大物なのだとえりるは感心しながら、適当な相槌を打った。

「そういえば、お前この後の予定は？ デートの約束があるのなら引き止めないが」

「いえ、大丈夫です。講義でもして下さるのですか？」

この場合の講義とは、無論魔術的なものを指す。

「いやいや、時間も頃合だからね。飯でも行こうかと思っていたんだ。もう昼は食べたか？」

「いえ、まだですので、よろしければお相伴に預かってもよろしいですか？」

「うん、よろしいよ。にしても、お前は回りくどすぎるね。もっと歳相応の言葉を使いなさい」

そう京子は苦笑しながら、入り口にあるコート掛けに掛かっている茶色いコートのポケットから、車の鍵を取り出した。

二人は事務所を出て白いワゴンに乗り込むと、京子は、ああ、と呟いた。

「どうなさったんですか？」

「いや、了の飯も調達しないといけないのに気づいただけだよ」

「大変そうでしたからね。美味しいものを買ってこないと」

「そうだな。癪だが豪華な弁当でも買ってやることにしよう」

そんな会話を続けながら、二人は大通りを南下する。

えりるの隣にはフェニックスが大量に流れていく。

「さっきの話の続きだ。えりる、真理とは何だ？」

「——生きながら脳外に達すること、ですか？」

「それは禅で言う真理だな、いやその場合では正解だよ」

「何故そのようなことを？」

えりるは不思議そうに京子のほうを向いた。

それに彼女は振り向かず、フロントを向いたままに続ける。

「今朝の爆弾が今際、そう呟いてね」

「真理ですか」

「大悟、小悟、漸悟、頓悟、悟入、解脱、涅槃、まだ多くの言葉はあるがこれらの全てが、人のステージを超越した際の状態を指す言葉だ。この場合の真理とはこれらを指すのか否かで、今回の対応が決まるな」

えりるはそれを聞くと、不思議そうに解を促した。

「真理がそれらを指す場合、往々にして私たち魔術師、いや、宗教が絡んでくる。

被害者、渡井とか言ったかな？ もし渡井氏が何らかのそれに関わって、儀式を組んでい
たとするならば、その儀式には何らか目的がある。

雨乞いだったら何も言わないがね。だが雨乞いの際に人身御供を必要とするケースは最近

では聞かなくなった手前、違っただろうな。それに神に捧げるはずの生贄が私の前で死ぬ意味も分らない。

しかも誰かに紹介されたと来ている。紹介した奴の目的や正体が分らん手前、私が表立って調べるわけにいかないな」

「儀式、ですか？」

彼女は突然湧いてきた言葉に眉を顰めた。

ああ、お前にはまだ話してなかったね、と京子は渡井 恭一という人物について語った。最初は大人しく、その結滞な話に耳を傾けていたえりるだが、次第に顔を曇らせていった。無理も無いだろう。年頃の女性にしたら当然の反応だ。

「つまり、その渡井さんという方は自分の村の誰かに殺されたけれど、誰かに助けられて、言われるままに何を依頼するでもなく、その事実だけを京子さん達に告げて、事切れたと？」
そうだ、とハンドルを右に回しながら答える京子。

「その村では豊作祈願の為に——村中の男で巫女を犯す、という儀式を行っていた。更にその渡井さんは今際の際に、真理に、曼茶羅と」

「だが、曼茶羅とは密教についての悟りの境地、つまり真理と同義だ」

「それが故意に分けられているのか、そうでないのかで、京子さんの出方が変わると」

「まあ、葉月達の報告待ちだな」

だから居なかったのですね、という反応に、ああ、と返す京子。
しばらくすると目的のレストランに到着した。

「さて、それじゃあお前の惚気話でも聞きながら飯でも食おうか」

二人は笑いながら香ばしい匂いへ誘われて行った。



「お前は？」

「僕はこの神社の神主だよ」

そう、ちつとも神主らしくない格好と雰囲気纏って、その男は現れた。

短く切り揃え染められた茶色い髪。黄色と緑のアロハシャツに、色の褪せたジーンズの男。少なくとも、第一印象では神主だとは到底思えない出で立ちだった。

「随分悪いようですが、その子大丈夫ですか？」

「少し熱気にやられたみたいで休ませている」

「そうですか。それならここはいけない。涼しいところへ案内しましょう、さあこっちに」
促されるまま、ちつとも威厳を感じない男に葉月は怪訝を感じながらも、男の言うことは理に叶っている。しょうがなく葉月達は神主に従うことにした。

神主と名乗る男は司生を背負いながら、葉月はその一步後ろで長い階段を下りる。

「おい、アンタ、本当に神主なのか？」

彼女の怪訝はしようがないことだと伝える。

そもそも神主と名乗る男の格好は神主のそれではない。無論年中そういう格好をしているわけではないだろうと葉月は思っているが、それでも発言などにもちっとも厳格さを感じないのだ。

「はは、らしくないだろ？ 僕もそう思うよ。実は神主になったのは去年からでね」
通りで堂に入ってないわけだと、葉月は納得した。

「まあ、見て分ったかもしれないけど、あの神社はもう使われなくなって久しくてね、僕は管理しているだけなんだよ」

司生を背負っているからだろう、多少息が上がっている神主の額からは汗が流れている。「あの神社は何を祭ってたんだ？」

「ああ、確か八幡様だよ」

八幡様。つまり八幡大菩薩のことかと葉月は思い出す。別に珍しくもない。日本で二番目に多い信仰対象だ。

「天照宮ってわりに、天照大神じゃないんだな」

「元々は八幡様じゃなくて、この山自体を祭っていたらしんだけどね。山から日が出てくる様子を見て、その神々しさに信仰されてここが出来たらしいから」

つまり太陽を生む山として、崇められてきた山への敬意の神社だったらしい。

口には出さないが、それならなおさら太陽に関係のある主神、天照が祭られているのが普通なのではないだろうか、と、葉月は、ぼう、と思った。一括りに出来るものでもないか、とも。

「その神社が村の開合に使われているらしいが、それはアリなのか？」

「ああ、村長さんのこと知ってるの？ お孫さん、ってわけじゃなさそうだね？」

「質問を質問で返すな。孫じゃない。ソイツとは今朝も会ったばかりだ」

葉月の高圧的な態度に、その神主は、へえ、とだけ言う。と葉月を舐めるように見渡した。まだ下界は遠い。

「まあ、合併してからはあまり使われなくなったけどね。普段は会合に提供していたよ。公民館代わりにしてたのかな？ ——それにしても君は何を知りたいの？」

「この街の事だ。これが仕事だからな」

「探偵の真似事かい？」

「そんなとこさ」

そこで会話が途切れる。太陽だけが自己主張を止めない。

「僕としたことが自己紹介してなかったね。僕の名前は広田真^{こうだ まこと}。君は？」

「如月 葉月。ソイツは成神 司生。」

「如月さんに司生ちゃんね。家はすぐだから、司生ちゃんを休ませている間に色々教えてあげるよ」

「悪いな」

さすがに神職者は気前が良いと、葉月は彼女なりの礼を述べて彼の後についていく。どの道、司生の体調が戻らない限り帰ろうにも帰れないのだ。

下界が薄っすらと見えてきた。

◇

『なるほどな。儀式の行われていた神社は、元来信仰していた御山の上に建てられたと』
「で、時が流れ、神仏習合よろしく祭神は八幡だそうだ」

数時間後。

葉月が街の来歴や神社の事など、聞いていた内容を京子に携帯電話で報告していた。

三十分程度で司生も復調したが、しばらく神主に聞き込みを続け、つい先ほどそれも一段落して今に至る。

現在は神主と別れ、中心街にあったホテルのロビーで涼みながらの会話である。

あまり人氣がなく、伽藍、としたロビーは質素の一言に尽きる。

少なくとも大理石ではない、冷たい石畳は空調の循環を促しており、足元が寒い。

「どこに居るんだよ？ やけに五月蠅いぞ」

受話器の奥は、ガヤガヤ、と五月蠅く、京子の声が聞き取り辛かった。

『ああすまんね。今えりるとファミレスに居るんだ』

「俺に仕事させておいて、お前は悠々と飯か。何様だよお前」

『お前の雇い主だよ。まあ、悪かった。それで、神社には他に何かなかったのか？』

「司生が変な砂を見つけた。水晶の粉だとさ」

『ふむ？ ちょっと司生に換われ』

京子その言葉に、葉月は隣で、ぼう、としていた司生に電話を投げよこした。

「何も投げなくてもいいのに。誰？ 京子？」

頷く葉月と司生が話し始めるのは同時だった。

「なあに？ 私疲れてるんだけど？」

『そうか、それなら今日はそつちで一泊してこい。それが今日の報酬だよ。金は口座に振り込んでおくと葉月に言っといてくれ』

「え、うん。分った」

『それで本題なんだが、水晶の粉が散らばってた？』

「うん。雑に払われてたから気づいたんだけどね。何かの形を箒か何かで払ったんだと思う」
『形に心当たりは？』

「ないわ。それに、砂と同化しちゃっていたもの。元の形なんて想像できない。でも、魔力が少しだけ通ってた」

『ふむ。依頼人の言葉を鵜呑みにするのなら、砂曼茶羅と言った所かな』

「ふうん？ 心当たりがあるのね？ それじゃあ換わるわよ」

『ああ。すまないね』

それを聞いて、司生は葉月に電話を返す。

「で、俺たちはこれからどうすれば良い？」

『今日はそっちに居てもらおう。こちらで少し調べ物があるからな。別行動で結果を報告しようとしよう。これからの事は司生に指示はしているからそれに従え。ああ、そうだ。一応砂のサンプルがほしい。少しだけ取ってきてくれ。できれば夜の状態も知りたい。頼むぞ』

「面倒臭いな」

『ははは、そう言うな。依頼人の話をお前も聞いたろう？ 特に何も無いとは思うが、夜という状態に何かあるのかもしれない』

「それじゃあまた連絡するぞ」

葉月は相手の反応も窺うこともせずに電話を切る。

「えっと、お金は入金してるんだって」

そういう事情に詳しくは無いのだろう。司生は困ったように葉月に伝える。

「そうか。ならまずは金を調達しないと。まだチェックインしても部屋に入れないだろうから、街でもぶらつくか。お前に麦藁帽子でも買ってやる。また倒れられても困るしな」

「えー、もっと可愛いのが良い」

「何でも良いさ。どうせこれは京子持ちだ」

葉月は指でお金のマークを作って見せた。

「なら最初は食事しない？ 私もうお腹へこへこよ」

「そうだな。おもいっきり贅沢してやるか」

「うん！」

司生は笑顔で、葉月も微笑を浮かべながら、暑い、暑い街へと足を伸ばした。



蒸し暑い夜だった。

じいじい、と求愛は止まず。

カツカツ、と今朝に訪れた神社の階段を葉月は一人で歩く。

もう遅い時間だからお前は寝てる、と言ったのはどれくらい前か。
時間にして夜の零時。

丑三つ近くに行動するのは彼女の世界では常識であり、夜とはこの刻を指す。

皿々、と木々が揺れ、彼女の包帯を剥ぎ取らんとぬるい風が喚く。

まさしく、常人であれば近づくのを躊躇う場所である。

だが言うなれば、彼女はこの空間を好んでいた。

一言で不気味と断言できるこの場所を。

それは文化が無く、自然のみが息しているが故。

彼女は五月蠅いモノを嫌う。

が、彼女は同時に酷く自然の音害を好む

この空間では、自分の足音が異物であり、排他されるべき音なのだと心を弾ませる。

しばらくして、彼女は頂上へとたどり着く。

相変わらず天に向く社から階段が降りている。

当然だ。昼夜に応じて建造物が変化することはない。

いつもとは違う環境に居るからか、葉月の歩調は軽い。

きつとこのような感情を、愉快、だというのだろうと、彼女は感じた。

階段を迂回し、社の側面へと回る。

そこには今朝に見た水晶の砂。

そして、水晶のように美しく。

月の光を反射させる。

一振りの刀を持った少女が居た。

異物だと、葉月は感じた。

この自然にあつてはならない状況。

真つ暗なこの世界に。

少女の、真つ白い、巫女装束が、やけに映える。

背丈は葉月と同じくらいかやや大きいか。

どちらにせよ、彼女の足元に用事があるのだ、接触しないわけにはいかない。

ただ、どこか危ういものを葉月は感じていた。

無論、今朝に聞いた巫女の話もある。

無論、握られている凶器の存在もある。

が、それ以上に、目の前の少女はこの世界を見ていないような。

否。この世界に居ないような近づきがたさを持っている。

言うなれば、彼女の纏う雰囲気は未知なのだ。

「お前、ここで何をしているんだ？」

葉月のその声に、来訪者の姿を初めて確認したらしい。

そんなゆつくりとした仕草で葉月を下から嘗め回す。

まるで、ナメクジが這うような緩慢さだった。

そして、彼女の視線がようやく葉月の顔にたどり着いたとき、彼女は大きく眼を開いた。

「またなの？ また現れたの？」

少女の刀を持つ手に力が入るのを確認して、葉月は溜め息を吐いた。

自分の直感は正しかったのだと。

やはりこの女は、狂っている、と。

会話にならない以前の問題である。

でなければこんなにも、敵意をむき出しに睨みつけてくる筈など無いのだから。

「その眼で」

少女は呟く。

葉月は睨む。

「その眼で——」

少女は前傾し。

葉月は後退し。

「私を見るなど言ってるだろう！」

少女は闇を駆ける。

葉月は背面に消ゆ。

二人の距離は約五メートル弱。

この少女の速さなら初動を含んでも二秒と掛かるまい。

が、葉月も同時に後退している。

彼女の背後が階段あるのは不幸。

しかし、見事な身体能力である。

葉月は地形的不利を物ともしていない。

少女を正面からの確に捉えつつ、バックで階段を駆けるのだから。

「待て。いきなり何なんだよ、お前！」

初対面でこのような展開になったのだ。無理も無い。

彼女にしては珍しく動揺の色が濃い。

「五月蠅い、黙れ！」

少女は鈴の声で甲高く鳴く。

まるで雲雀ひばりのようだ。

縄張りを主張するかのように。少女はナク。

侵略者は排除すると言わんばかりに。

手にした銀の刃を水平に振り上げ。

一気に水平に刀を撫でる！

しかし、それを良しとする葉月ではない。

顔に当たる寸前のところで彼女はそれを避け、更に背走を続ける。

一、二、三。

袈裟、返し、突き。

背走を続ける葉月に繰り出される三連撃。

その三度を同じように交わし続ける。

一度目を奇跡とするなら二度目は偶然。

しかし、四度ともなれば必然だろう。

つまり、この葉月という少女はこの斬撃を避けているということになる。

そうして七度。葉月は彼女の腕の動きを注視しながらそれを避けた後。

足に力を込め、後方へと大きく飛んだ。

「お前、意味分らないけど、来るなら来いよ！」

ようやく本番だと。葉月は口を吊り上げて笑う。

その光景に、少女は見惚れることになる。

月を背に、葉月の包帯が、解かれる。

黒い片眼が、碧に変わる。

エメラルドのような二つの宝石。

葉月の背には黄色い月。

引きつる色は赤。

白い包帯が風に流されていく。

そうして、人として歪な、碧の眼。

息を呑むという言葉は、刀を握る少女のようなことを言うのだろう。

彼女は、その出来すぎている光景に足を止めていた。

飛んでいた葉月が着地する。

二人の距離は七メートル。

高低差も手伝い、この少女ならば一足で迫るだろう。

それほどにこの刀を持つ少女の身体能力は高い。

が、それを出来ずに居るのは彼女の眼下で笑う葉月の存在だった。

「来ないのか？」

右人差し指で攻撃を促す葉月。

しかし、それに反して相手は動こうとはしない。

いや、動けないのだ。

あの碧の両目に、気圧され、威圧され、舐められ、覗かれている。

動けば全て絡められ、奪われてしまうという感覚に、少女は動けない。

寒いと彼女は感じている。

生ぬるい風が包んでいるというのに、寒い。

足は先ほどから震えが止まらない。

怖いのだ。

怖くてしようがないのだ。

行つてはいけない。

向かつてはいけない。

下にあるのは、地上にあるのは、奈落にあるのは、滅びだけなのだ。

したがって 遵つて、彼女に出来ることは、階段を使うことではなく。

階段から山道へと入ることだった。

彼女は逃げるように、葉月を見ないで左の藪に姿を消した。

その背中に葉月は舌打ちする。

覚悟を決めて損したとばかりに。

そうしてきっかり二秒後に溜め息を吐いた。

またこの階段を登りなおす羽目になったと気づいたからだだった。



「了。——真理とはなんだ？」

暗い繁華街を一台の車が走っている。

日は既に丑三つ時。灯りはとうに闇に飲まれていた。

ただ、京子が運転するヘッドライトだけが闇を裂いている。

「分りません」

思考する猶予すら取らずに、助手席の草野 了は即答した。

それに京子は溜め息を吐く。

「当てずっぽうでも構わないから、何か言ってみようと思わないのか、まったく」

「いや、これはむしろ学習した結果です。何かにつけて京子さんは僕を貶すじゃないですか。さすがに温和な僕でもへこみます。だったら知らないで最初から降参したほうがいいかと」

「悉くと裏目だね、お前。そのほうが怒るよ、私は」

苦笑交じりのそれに了は、うへえ、と漏らした。

それにしても、自分の弟子にしては手が掛かりすぎると、ハンドルを握りながら京子は考える。

最初のは優秀で、今では立派に葉月を育てているし、次のは年齢の割には出来すぎた人格者で、魔術の腕自体も極上とは言わないが悪くない。

そう、二人とも実に手の掛からない自慢の弟子だが、最後のコイツだけはどうも手に余る。氣立てはないし、知識もない。向上心もなければ、才能も無い。

成り行きとはいえ、手にかかる奴の面倒を見ることになったもんだと、京子は苦笑する。

「そういえば、今どこに向かっているんですか？」

京子が笑っているのを自分の手柄と思ったのだろう、了は笑みを浮かべながら問いかける。顔自体黙っていたればハンサムの種類に入るだろう。

「ああ、言っただけだったか。“あけみ”だよ」

「うへえ、帰りましょう」

「なら降りるか？」

ちなみにここから事務所まで五キロほど離れている。それに了は再度、うへえ、と唸った。

その会話からしばらく走り、京子は駐車場に頭から車を止め、明かりの消えた【シヨールパブあけみ】のネオン看板を素通りし、重厚で重苦しい扉を開ける。

カランカラン、と乾いた鐘の音が来店を知らせる。

店の中央には四方を金網で囲んだステージ、その右には硝子テーブルに黒革ソファ。左に大理石のカウンターがある。

最初にきついタバコの匂いに包まれて、次第に慣れてくるとブランデーの芳醇な匂いに包まれる。照明は既に店じまいしているらしく、暗い。

微かなジャズが聞こえてくるが、小さすぎて何語で喋っているか聞き取ることができない。

「お客さん、もう終わりだよ」

気だるそうな声。カウンターの奥から聞こえてきたそれは、明らかに酒に潰されている。

「お前に会いに来たんだよ、明美」

京子の低い声色に、明美と呼ばれた人物は小さく痙攣し、急いで振り返る。

「――、はは、なんだ京ちゃんか、意地悪いね」

所謂、ガラガラ声という表現がぴったりな声で、明美は笑った。

性別的には間違いなく男性なのだが、容姿は女性だ。

決して美人だとは言わないが、化粧の仕方や仕草に関しては京子より女性的である。

ただ如何せん歳が見え隠れする肌の張り方ではあるが、仕様があるまい。

「なんだい、丁ちゃんも一緒かい。相変わらず食べちゃいたいくらい可愛いわねえ」
それに了はいつもの調子ではなく、ひい、と言った。

軽いやり取りのあと、カウンターに腰掛ける二人。明美は大きく欠伸をかみ殺した。
「どうしたんだい？ アンタが来るなんて珍しいわねえ」

「ちよっと調べてほしいことがあってね」

「はは、うん。本当に、珍しい」

しばらくの沈黙。

了だけがこの空白を分らずに過ごしていた。

「うん。積もる話は後。さて、何について調べれば良いんだい？」

「現在の和田栗市、知りたいのは以前の祖宇津村について」

「何を中心に？」

「宗教背景とレイ・ライン、薬物の流れ、あとは祭事に、神社について、明日までに」

「んもう、人使い荒いわね」

そういう明美の顔は明るい。さっきまでの気だるげな雰囲気は嘘のようである。

「本当、考ちゃんに——」

そう言い掛けて、明美は言葉を飲み込んだ。

京子は静かに笑う。

了は先ほどから空白に気づいているようだが、何が埋まるのかは分らないままだった。

「良いわ。調べとく。それで飲んでいくの？」

「いや、車で、」

「僕が乗って帰りますから、京子さんはゆっくりして下さい」

了がいつもと打って変わり、力強い反応で断言したので、京子は毒を抜かれたようだった。

「そうか？ なら頼む。この前のように擦るなよ？」

彼女はそういうとコートから車のキーを了に渡す。

分りました、と出て行く背中に、帰っちゃうのん、と明美の声。

了は引きつった笑いをしながら振り返ることをせずに店を出た。

しばらくの沈黙。

京子はコートからロングピースを。

明美はカウンターからウイスキーを。

「何も作ってあげれないけど」

「これを肴にやるよ」

京子は苦笑しながら安いジッポライターで火を点ける。

「そう？」

グラスに氷を入れながら明美も同じように苦笑する。

「いつぶりになるかしらん？」

「二十の時に挨拶に来たきりだったから、七年かな」

「久々に来たと思つたら仕事の依頼なもの、笑つたわよ」

「はは、悪いね。今回は厄介そうで、裏が取れないと動きようが無い」

グラスに鼈甲が注がれるのを眺めながら、京子は積まれていた灰皿を手元に引き寄せ灰を捨てる。

「本当、考ちゃんに似てきたわね」

「そうか？」

「そうよ。本当に似てきた」

グラスを渡す明美。大理石の上で、からん、と鳴った。

「飲まないのか？」

「じゃあ、私もただこうかしらん。久しぶりの再会だものね」

そういうと、同じ手順で自分の分を用意し始める明美。何十年も同じ工程を踏んできたのだからと分る手早さだ。

再会に、とグラスを合わせる二人。店内にジャズ以外の音が響いた。

「もう飲める歳なのよねえ。初めて孝ちゃんと来たときはミルクだったのに」

「あの頃は二人が付き合つてると思った」

京子のそれに明美は声を上げて笑う。

「しようがないだろう、あの頃は疎かつたんだ」

「ああ、可笑しい。そうねん、確かにそういうバカなことをし合う関係だったもんねい」

「出会い頭に、会いたかつたよ明美、私もよ孝介、なんて言えば勘違いもする」

指で琥珀の液体を回しながら、京子は笑う。苦笑こそせど、このように愉快そうに笑うのは珍しい。

「そうだった、そうだった。あの頃の京ちゃんは、からかいがいがあつたもんねい」

すつ呆けたこと言つて、良く笑われたもんだよ。と京子はウイスキーを喉に流す。

「一本もらつて良い？」

「止めたんじゃないのか？」

そう言いながらも京子は箱を指で叩き、タバコを明美に勧める。

京子のライターを手に、手馴れた手つきでタバコに火を点け、煙を吐き出した。

「あらん、こんなに美味しかったかしらん？」

そうは言うものの、明美はそれを再度吸うことはなく、灰皿にタバコを押し付ける。まだ長いそれは途中で折れた。

「勿体無い」

「京ちゃんもでしょう」

灰皿には同じように吸われたタバコが二本。

その事実二人は再度笑った。

「アイツ、逝ってどれくらいになる？」

場の空気が変わる。いつかは触れる話題だったとはいえ、やはり空気が張り詰めた。

「十二年。あの頃は十五だった」

「こっちじゃあ珍しくないけど、中学、二？」

「三」

「京ちゃん、それからすぐに行方不明になったわよねい」

「五年間はヨーロッパに」

「その間に一回も帰ってこなかった？」

「一度だけ」

「じゃあ、ほぼ行きっぱなしか。通りで天音ちゃんが心配してたはずだ」

「アイツここには？」

「二ヶ月に一回くらい。よくミディちゃんと飲んでる」

「へえ。想像付かないな」

しばしの苦笑。氷が、からん、と鳴った。

「でしょう？ でもあの子強いだよ。むしろミディちゃんの方がダメ。一杯で真っ赤だもん」

「それも想像付かないな」

「今度三人でいらっしやいな」

「店が無くなるかもしれない」

「それは性質の悪い酔っ払いねい」

また笑う。京子がこれほど気を許している人物はそう居ない。

それほどに、この開合は彼女にとって好ましいものなのだろう。

「考ちゃんも弱かった。弱いくせに好きなもんだから、よく裏で吐いてたわねん」

「感覚が鋭すぎるのも考え物だと、介抱しながら思ってたよ」

「あはは、中学生に介抱されてたか、孝ちゃんは！」

「なのに方向音痴だから意味が分らない。車で移動すると壊滅的に迷う」

「そうそう、予定時間なんか守ったことないんじゃないかしらん、彼」

「でも、憎めないんだよな」

「そうねい、不思議ねい」

二人の臉には同じ景色が流れているだろう。

同じ空間で、同じものを飲み、同じ空気を吸って、同じ景色を眺めている。

「あの眼が好きだった。何でも解ってるくせに優しいあの眼が」

「本人も、でしょ？」

一寸の間を空けて、京子は苦笑した。

「そうだな。当時は分らなかったけど、私はアイツが好きだったんだろうな」

優しい微笑み。少なくとも当時の彼女を知る人間にしか見せない、京子の顔だった。

「だったんだろう、じゃないわよん。そんな曖昧な感情だったら今のあなたは存在しないはずよん」

「はは、そうだな。魔術師なのに、自分のこと判ってないな、私は」
「本当よう」

「でも、魔術師だから、今の私がある」

彼女の体は二十歳の時点で止まっている。

身体的に完成している時点で、彼女は止まることを望んだ。

精神は老いないため、魔術師という面ではまだ成長する余地はあるのだろうが、彼女の目的を考えればその判断は正しい。

無論、止めようと思っ止められるものではないのだが。

「探して、どれくらい？」

「七年。足取りすら」

「——そう」

沈黙が流れる。お互いに喉をウイスキーで濡らした。

「今いくつ？」

「だから二十七。さすがにそろそろ怪しまれる歳になってきた」

そう彼女は苦笑すると、明美は大きく溜め息を吐いた。

「はあ、二十七でその張り艶。というか、二十歳の体なんだから当然よねん」

「社会的には厄介なんだがね」

「違うわよん、若さイコオル、正義。ビバ、アンチエイジングのご時世に、よもや不老。はあ、いいわねん。羨ましい」

「天音も最近同じことを言うんだが、明美さんの影響だったか」

「それも違うわよん。これは女性共通の悩み！ほら、まだ京ちゃん疎い。まだ世間の女性に成れてない！」

そう言われてもなあ、と苦笑する京子。

まだまだ夜明けまでは長い。

思い出に酔うのも一興だと、彼女は鼈甲色を飲み干した。

次の日、葉月達と京子は和田栗市ホテルの一室で合流した。

昨晚葉月たちが使った部屋は簡素な作りで、無駄な装飾がない。どこにでもありそうな、ビジネスホテルだ。

京子を部屋に招いた葉月は、欠伸をかみ殺しながら小さい袋を京子に投げ渡し、自分が使っていたベッドに腰を下ろした。ベッドの対面にある椅子に京子も座る。

「それが言っていた水晶の砂だ。お前が言っていたように、夜だと薄っすらと光ってた」

さっきまで寝ていたのだろう、彼女の髪には寝癖が付いていて、いつものような凄みを感ずることができなかった。言うなれば歳相応だ。

「そうか。こちら裏が取れたよ」

灰皿を探しているのか、彼女は辺りを見回すが、見つからないようだ。

これからどうするんだ？ と葉月は呟いた。これが正式な依頼ではないのだからという意味なのだろう。

「確かにこっちで調べても有害ではなさそうだからね、これで終わりだ。後は文財に報告するぐらいで、お前の役目は終わりだよ」

葉月の奥のベッドから、司生の寝息が聞こえる。

肩の荷が下りたからだろう、葉月は溜め息を吐いた。

「ああ、そういえば。昨日可笑しな奴に会ったぞ」

一転、嬉しそうな態度を取る葉月。彼女にしては弾んだ声に、京子は興味深そうにタバコケースを取り出した。灰皿を見つけたようだ。

「昨日な、その砂を取りに行く途中で女に会ったんだ。その女が滅茶苦茶でさ、急に襲い掛かってくるんだぜ？」

その発言に京子は苦笑した。襲われておいてその態度は無いだろうと。

「動きは素人だったけど、妙に身体能力は高くてさ。魔術的な素養も無かったみたいだし。

俺と同年くらいだったから、今から鍛えれば良い線行くぜ、アイツ」

「お前にそう言わせるといのは大したものだな」

「ああ、楽しくって思わず包帯取っちゃったしな」

へえ、と煙を吐きながら京子は口元を引きつらせた。

年齢的には化粧や服装を話すことに熱心になりそうな歳だというのに、彼女の笑う場所がそういう無骨な部分だったから。

「でも、すぐに逃げ出したんだけどな、ソイツ。せっかく楽しめそうだったのに。なんか獲物を扱いなれてない感じだったな。獲物の重心に戸惑ってるみたいだったし」

「何を使ってたんだ、その女は」

「ああ、刀だった。なんか、“飛燕”って彫られて——」

その単語に、何故か京子は葉月を睨み付けた。

「なんだよいきなり」

「飛燕、と彫られていたのか？ その刀には」

肯定する葉月。

「見間違いないかな？」

「包帯を取って確認したんだ。それで飛燕って名前じゃなかったら俺はベレッタでロシアンルーレットしても良いぜ」

その葉月の発言に、京子は声を出して笑った。

その声の大きさに司生が五月蠅そうにしたが、それでも彼女は止めなかった。普段から冷静な彼女にしては珍しい光景といえる。

「どうしたんだよ」

「葉月、予定変更だ。今夜、祖宇津天照宮に行く」

葉月は大きく溜め息を吐いた。



そして、夜が来る。

昼の内に司生を事務所に戻して、葉月と京子はホテルで連泊の手続きを済ませ、時間を思い思いに過ごし、現在に至る。

「何だって、こんなことをするんだ？」

葉月のそれに、京子は答えようとしなかった。

今朝のやり取りから、彼女の様子は急変した。いつもの余裕が感じられず、何にしても上の空かと思えば、急に笑い出すときもある。

今朝からずっとその調子で、京子を気味悪く、葉月は感じていた。

夏の蒸し暑さは容赦なく葉月を包み、蒸す。彼女の額に、じわり、と汗が浮き出ている。

まもなく時刻は丑三つ時。昨日葉月が刀を持った少女と出会った刻限だ。

(まあ、何があってもコイツと一緒になら問題はないだろう)

葉月は、ぼう、と考える。

目の前でタバコを吸いながら、地続きに天を目指す道を睨む彼女は、葉月と比べ物にならないほどに強いのだ。

故に何があっても平気だと、葉月は思った。

静かに、京子は階段を昇り始めた。それに葉月も続く。

階段は相変わらず長く、高低も楽ではない。頂上に着く頃には、葉月の息は少しだけ上がっていた。

一息吐き、葉月は違和感を覚える。

だがすぐにその原因に思い当たる。

昨日は付いていなかった本殿の明かりが付いていることが、その正体だった。その明かりに。本殿に、京子は向かう。

それを追いかけてようとして葉月は歩を止める。

自分の隣から異様な殺気を感じたからだ。

「お前、今朝あんなに楽しそうだったからな。ソイツは任せたぞ」

朝の問答から聞くことのなかった京子の一声目が響く。

どこか皮肉有り気な音に、葉月は舌打ちをした。

「はっ、俺は当て馬かよ」

そう毒付くも、彼女の口元は大きく引きつる。自分だってこの状況を楽しんでいるのだと気づいて、葉月は愉快そうに笑う。

「いいぜ、来いよ。意味分らないけど、お前と遊ぶのは楽しそうだ」

彼女の声の先には、昨晚の刀を持つ巫女装束の女。



二人が境内から消えるのを確認して、京子は本殿から伸びる階段を登る。

「待たせたな」

木製の門を開けながら、京子はその奥に座す神主を確認した。

その男は、広田 真だ。

葉月に状況を提供し、日射病の気があった司生を介抱した男である。

「いえ、そう待つてはおりませぬ」

真の口調は、まさしく神職者のソレである。昨日の言葉遣いが嘘のようだ。

四方を蟬燭で灯す部屋の中央に座る真。座布団は無いですが、と京子に着席を求める。

彼女はそれに応じた。

「このような時間を指定するとは、何か事情でも？」

「いや、この時間は何かと都合が良くてね。合わせてもらって申し訳ない」

「構いませぬ。それで、貴女が電話の主である、古水 京子様で間違いないですね？」

「これは失礼」

彼女はそういうと、コートの内ポケットから黒革の名刺ケースを取り出すと、それから一枚名刺を真に差し出した。

「日比野探偵事務所。探偵。もしや、あの如月さんや、成神さんとお知り合いで？」

「ああ、まあ、そうだな。アイツ等は助手みたいなものだ」

成る程。と真は呟く。

「皆、往々にして若い。担がれているかと疑いました」

「あの二人は本当に若いが、私はもう二十七だ」

「それは失礼。お若く見えたものですから」

軽く真は笑う。京子もとりあえずそれに合わせた。

「それで、電話では聞きたい事があると仰っていましたが？」

「ああ、二、三、質問があつてな」

「答えられることでしたら、何なりと」

真の言葉をゆっくり飲み込んで、京子は問う。

「刻夜という男を知っているか？」

その言葉には、どのような真意があつたのか。

真は数秒固まり、数秒後に、知りませんと答えた。

「そうか。では“飛燕”という刀について、何か心当たりあるか？」

先ほどと同じように、真は考え、それはこの神社の御神体です。と答えた。

「じゃあ、最後に。真理とは何だ？」

真理とは。と、その言葉に反応する真。明らかに動揺している。

「真理とは？」

京子は更に、問う。

たっぷり二分ほど考えたような唸りの後、真は観念して。

「真^{まり}理とは、私の妹です」

そう、呟いた。



「なるほど。昨日ここの元村長だつて男が着てね。真理だの、まりだの、五月蠅かったんだ」

了に聞いてもまともな答えが返ってこなかったが、結局は名前だったわけだ。と京子は溜め息を吐いた。

「で、飛燕という刀が御神体だと言つたが、いつから伝わっている？」

「十年ほど前からです。元はこの山自体。いや、この社の立つ場所自体がソレでした」

「では、外にある砂曼茶羅は？」

「その際に、決して形を崩さぬようにと、村長が」

その言葉に、京子は舌打ちをした。折角の手は、昨日彼女の目の前で絶命したから。

「村長から何か聞いていることは？」

「刀を御神体にする際に、僕達の親には何か言っていたらしい。僕もこの神社を引き継ぐ際に、そのことは伝えられています。なんでも、あの曼茶羅は八幡様を模っているのだとか。でも、何故あの位置なのか。どうせならこの場に描けばいいと思うんですけどね。現

にあんな位置にあるから、形が崩れてしまった」

それは、きっと龍脈からわずかに、この社がずれているからだろう。今朝、明美から聞いた話によると、この祖宇津天照宮は沖ノ島から太宰府天満宮を結ぶ線上に存在するらしい。つまり、霊的力がこの山には存在しているのだ。

「何を？」

「この村をもう一度盛り上げる為に、神を降ろすと。そんな時代錯誤の考え、笑ってしまいますね」

そう、真は笑う。この男はこちら側の世界を知らないのだろうと、京子は思った。

こちらを知る人間ならば間違ってもそのようなことは言えまい。

「神とは八幡を？」

「だと思えますけど」

伊勢から伸びているなら天照の可能性だってあるわけだ。もしかしたら弁才天。いや、イチキシマヒメだろうか。

どちらにせよ、この男じゃあ役不足だと、京子は溜め息を吐いた。

自分の欲しい情報は、この男は持っていない。

「最後に。何故お前の妹は狂ったようになってる？」

どうでもいいかのように、京子は聞いた。

それに、真は答えようとしめない。

「答えたくないなら答えなくていい。ただ、お前の当時に湧いた衝動は、お前のものじゃないよ」

そういうと、京子は立ち上がった。

「ど、どういう、ことですか？」

酷く狼狽した声が響く。

「どうもこうも無いさ。あの砂曼荼羅は八幡を模しているのだろう？ 八幡の特性は啓示だ。だが、それが壊れてしまったのなら、本来の意味を倒錯しているなら。お前に何か聞こえたなら。それは神のお告げなんかじゃない」

邪魔したな。と去ろうとする京子を、真は引き止める。

「ま、待ってください！ 何故！ 何故貴女は私の、私の罪を知るので？」

その言葉に、京子は立ち止まる。

「何故って、探偵だからだよ。探偵は秘密を暴くのが仕事だ」

「ど、どこまで！」

なおも食い下がる真。

「全部だよ。悪いがこっちはお前なんか相手している暇は無いんだ」

ぎい、と古びた木門に手を掛ける京子。

「わ、分かりました！ 待ってください！ 知ってます。私は知っています。刻夜を！」

その発言に。彼女の手は止まる。

「本当だろうな？ 私を引き止める方便だったら——」

「いや、本当に知っていますのです！ ですから！」

それに押され、京子は元の座布団に腰を掛けると、タバコを吸っても良いかと尋ねた。真はそれに頷いた。

「そ、それで、どこまで？」

「だから全部と言っているだろう。お前が妹を犯したことも、全てだ」

犯すという発言に、真は青ざめて反論しかけるが、それは寸前で止まり、ええ、とだけ呟いた。その通りなのだろう。

「本当に全て知っているのですね」

「お前が神職者じゃなければ、分らなかつたんだがね。日本の全ての宗教法人は、筒抜けなんだよ」

どういうことですか、と聞く真の言葉を京子は無視して続ける。

「だが事実は分るが二つだけ釈然としない、幻覚を見せるのに使った薬はどこから？」

「自分は昔医療。いや、大陸系の漢方を齧っています。まあ、使ったのは、簡単な、朝鮮顔ですね」

「ああ、通りで薬物の流通がなかつたわけだ」

白花洋種朝鮮顔は、全部位が幻覚を引き起こす。致死性すら証明されている植物だ。

ええ、この山では取れるのですよ、と真は言った。

「それで、何故犯した？」

「それは——」

京子たちの居る床部分で、かたん、と音がした。

「な、なんでしょう？」

「ネコか何かだろう。語らないならそれでいい。だが、刻夜のこととは吐いてもらおうぞ」

「それを話すには、全てを話さないといけないのです」
彼は寂しそうな顔をして話し始めた。

「この村のしきたりをご存知ですよ？ そう。村中の男達で、この村の巫女を侵すのです。何故このような儀式が行われていたかは定かではありません。ただ、僕がこの位置に居るといことは、つまり。僕の母親はこの村の巫女なのです。そしてある日。そう、村中がどこか浮き足立っていたあの日。お祭りの日です。その日の夜。僕は見てしまう。この階段に並ぶ夥しい程の男どもを。その卑しい顔を。そして、この場。僕が座るこの場所で、犯されていた母親の姿を。この神社はこのような村のしきたり上、女が生まれるまで儀式が続けられる。一人目は男の僕だから。また、この儀式は行われた。意味が分りませんでした。ただ、声を出してはいけなないと。僕はずっと、母親が犯されるのを、ただずっと、見ていたのです。そして、この儀式は母の代で終わることになる。それは、村という形を国が解体したから。もう少しそれが早ければ、二度目はなかったというのに。一度ならまだしも、二度目のことで、母は病んでしまい、妹を産んですぐに死んでしまった」

矢継ぎ早に、真は語る。自身の言葉に恐れるように、また急かされるように。

「そして僕は妹に、死んでしまった母親の影を見た。いや、見てしまった」

京子の吐く煙が、ゆらゆら、と天を昇る。

「それからというもの。僕は悶々とする日々を過ごしていました。日ごとに母親に似る真理を見て、自分は狂っているのではないかと疑う程でした。何故なら、僕は。真理に欲情していたから」

蠟燭の炎が彼女達の影を揺らす。

この場はあらゆるものが揺れていた。

「そして、貴女の言うように。声を。いや、お告げを聞いたのです」

崩れた曼茶羅から、崩れた啓示を聞いたのか。そんなことを思いながら京子は灰皿が無いことに気づいて、携帯用のそれをポケットから取り出した。あまり真の話に興味が無いのだろう。

「そのお告げは、僕の抑圧を解放する内容だった。そして、それを露見しないための、明確な指示だった」

それは、曼茶羅からの指示ではないだろう。全ては真の中で組み立てたトリックだ。曼茶羅はそれを、衝動を、促したに過ぎない。

「だが、それはもちろん許されることではない。もちろん、その欲求は自分も気づいていたし、そのお告げも抗い難い力も持っていた。でも、実の妹を。そりゃあ、父親は誰か分からないけど、同じ母から同じ経緯で生まれたんだ。家族愛というものが無いわけが無い。そして、祭りの日。巫女を犯す儀式は廃止され、本来の役割が失われた日がやってきた」

そして真の声に、更に悲壮と哀愁のような物が入り混じり始めた。

「その夜。一番自分の中での葛藤が大きくなった日。全身黒尽くめの男がこの神社に現れた」

京子は身を震わせ、真を睨む。それに一瞬彼は怯んだが、続きを促す彼女の眼に脅され、語り始める。

「男は民俗学者だと名乗った。過去に刀を御神体として納めた。そして、久々にこの村を訪れたとのことだった。そして、彼は言った」

彼は震えた。京子は固唾を飲み、続きを待つ。

そして、真の口が開いた。

「ああ、そういえば。あの神を作るシステムは顕在ですか？」と

その言葉に京子は、そういうことか、と呟いた。

無論、真にはその意味が分るはずも無い。ただ、話を続ける。

「もちろん、僕は意味が分らなかつたから聞き返した。すると、その黒い男は詳細に、この村を跋扈していた、忌まわしい儀式のことを語ったのです。そして、彼は僕を全身舐め

まわすように見た後。どうしたのです、妹さんがお待ちですよ。と彼は笑った。それで僕の中の何かが音を立てて崩れた。後はなし崩し的に、ずっと考えていた方法で、妹を何度も、何度も、犯し続けたのです」

真は、涙を浮かべながら、それでも決してそれを零さずに。嗚咽を混じらせながら語る。「ことが終わり、意識の混濁している妹を見て。正直、血の気が引いたのを覚えています。そして次の日。謝っても許されないと分っていたが、謝ろうと妹に話しかけて、更に血の気が引きました」

「覚えていなかった。いや、勘違いしていたのですね？」

やっと口を開いた京子のそれに、真は頷いた。

「妹もこの村の古いしきたりを知っていた。だから、勘違いした。幻覚を見ている最中に、何度も犯されたのがそれと重なったのでしょう。妹は母と同じように、この村の男どもに犯されたと勘違いしていた。そのとき。許されることではないが、助かったと思ってしまった」

「その日からですね？」

京子の言葉に、真は頷いた。

その日から。彼の妹、真理は見当違いの復讐をしているのだ。

瞬間。頷いた真の後ろで、がたん、という音が響いた。



「ほ、本当なの？ 兄さん！」

ヒステリックに、巫女装束の女は叫んだ。

アレが真理なのだろうと京子は、ぼう、と思った。

「ど、どういうことなの！」

ねえ、と真理は叫ぶ。真は何も返すことができなかった。

「もし、もし兄さんの言うことが本当なら、私はなんということ——」

自分の手を見つめる彼女。赤で濡れる幻視をしているのだろう。やってきた。やってしまった行為を振り返り、彼女は錯乱している。

「答えて！」

小さい境内に、真理の声は響く。彼女の後ろでは、葉月がつまらなそうにそれを見ていた。

「ぼ、僕は」

真は絞るように、声を出す。彼も混乱しているのだろう。

「確かに、お前を」

彼の言葉に対応するように、ああ、ああ、と答えを拒む真理。

「犯してしまった」

そして、その言葉で墮ちた。

「あはは、あはは。もう、嫌。嫌。嫌。いや。もう、いや——」

あはははは、と小さく壊れた真理。

その光景を見て京子は溜め息を吐き、立ち上がった。

真は京子の歩みを止めぬよう、座りながら脇にずれる。

真理の前に立つ京子。

「あ、あなたはだれ？」

「神だよ」

「——えっ」

真理が驚くのも無理は無い。この場に居る京子を除く全員がその言葉に驚いているのだから。

「辛いだろう？　ならば目を閉じて amen と言ってみろ」

「え、 amen」

半信半疑で目を瞑り、唱えた真理を。京子は優しく抱きしめた。

「あっ——」

「私がお前を救おう。委ねなさい。泣くことを許します」

どのような意味があったのか。京子の言葉の通り、真理は次第に嗚咽を混じらせて泣き始めた。

下らない。と茶番だと切って捨てるように葉月はその場を後にした。

それに真も続く。

境内は京子と真理の二人だけとなり、いつまでも、小さい泣き声が響き続けた。

「で、最後は魔術か？」

「当たり前だろう。私を誰だと思っている」

日比野探偵事務所では、今日も依頼人が来ずに、空調の効いた部屋で京子と葉月が何をす
るでもなく、思い思いに過ごしていた。

あの日から三日。

死体処理は文財に任せ、事件は終わり。ようやく夏休みらしい夏休みが戻ってきたと、葉
月は自分の机に頬を押し付けながら思った。

「記憶を操作したのか？」

「まあ、そんなところだ」

ふうん、と聞いておいて結局興味が無さそうに葉月は欠伸をする。どうも調子が出ないら
しい。

「記憶を覗いても手がかりは無かった。どうやら刻夜は妹には接触していなかったらしい」
「結局それか」

「当たり前だろう。私を誰だと思っている」

ついでに、記憶を弄ったのだろう。もしくは、最初からそれが目的だったのか。

まあ、名目はどうであれ。京子は真理という少女を救ったという事実は変わり無い。

「ああ、そう。今日から一人、住み込みでバイトが来ることになってるからな」

「あ？ バイト？ ただでさえ労働力は余ってるくらいだろう？ しかもここでバイトつ
てことは」

つまり、こちら側の人間であるのかと、葉月は体を起こして聞いた。確かにそれくらいの
衝撃はあったに違いない。

「司生も居るってのに、これ以上どこで寝泊りするんだよ」

「まあ、それに関しては倉庫を片付けるということで。了が既に片付けをしているから、お
前も暇なら手伝って来い」

明らかに嫌そうな顔をして、葉月は渋々席を立つ。嫌とはいえ、雇い主である京子の発言
をないがしろにできる人間は、この事務所には存在しない。

そうしてしばらく、何をすることもなく京子は一人でタバコを吸っていると、来客を告げる
ブザーが鳴った。

「来たか」

京子は口元を引きつらせて笑うと、立ち上がり、応接間を抜けて重い鉄の扉を開ける。

扉の奥からは夏らしい熱気と、ポストンバックを抱えた、広田 真理が居た。

「今日からよろしくお願ひします、京子さん」

「ああ、よろしくな」

はい、とタバコ臭い神に、真理は笑顔を向けた。